

木曾路名所圖會

三



20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



木曾路名所圖會卷之三



落合
 霧原山
 第本
 皂鵬巖
 丸山城跡
 岐阻路山中
 光德寺
 兜巖
 三富野
 羅天橋
 牛頭天王
 劔宮

目録
 落合橋
 御坂古蹟
 兼好法師跡
 下坂川
 吉籾路
 雄雄瀑布
 妻籠古城
 風越山
 園原先生碑
 伊勢山
 住吉祠
 熊野権現

十曲嶺
 菌原
 鎌倉街道
 木曾川
 大妻籠
 鯉巖
 古木若岳
 牧澤橋
 素波蘇嶽
 白山権現
 等覺寺

義信園場
 伏登邑
 馬籠
 永昌寺
 妻籠
 牛頭天王
 烏帽子巖
 捨樹澤
 横川戸橋
 揚籠山
 若宮祠
 観音堂



岩戸親音

○野尻

鹿島祠

妙覺寺

長野

貴布祢祠

阿滿橋

淨勝寺

小野滝

獸類皮店

鹿嶋祠

本曾様旧跡

本曾川

興善寺

名産和合酒

飯盛山

白山権現

野尻家

今昔兼平城

出雲祠

磐出親善

本堂
左京大夫親豐墓

形免川橋

親善堂

神明

御嶽川

御室

本堂
受岩祠

三富堂邸

本曾大河

住吉祠

本戸致春家

木曾殿館

天長院

須原

十王堂
鐘樓同鐘銘

藤川寺

阿弥陀堂

三飯廻翁閑居

御嶽

福島

稻荷祠

木曾古道

牛頭天王

諏方祠

聖尻城山

弓矢八幡

辨財天森

伊奈川橋

麻海祠

寢覺床

氣比祠

○上松

御嶽鳥居

福徳園隘

長福寺

本曾三月一

義康古城

名産

権守兼遠家

野婦池

○宮腰

本曾義仲城

山吹山

義仲手洗水

殺原宅

名制衣玉揃

眞明神祠

長泉寺

名造諸器

櫻澤橋

月家譜

赤魚

柿殿

研犬台

正八幡宮

通に次郎兼光館

荻曾川

○藪原

五反田橋

鳥居嶺

綱懸嶺

奈良井義高家

諏方祠

勢川

本曾義昌家譜

名製

水精山

斬蛇潭

南宮祠

今井四郎兼平城

往還橋

慈燈権現

巢鷹官舎

義仲硯水

奈良井橋

千村重照宅

平澤

構本澤

凍豆腐
凍蒟蒻
諸薬材
諸器物

蜂火嶺

明星巖

德音寺

巴御茶第蹟

徳育寺橋

極楽寺

土産

○奈良井

大寶寺

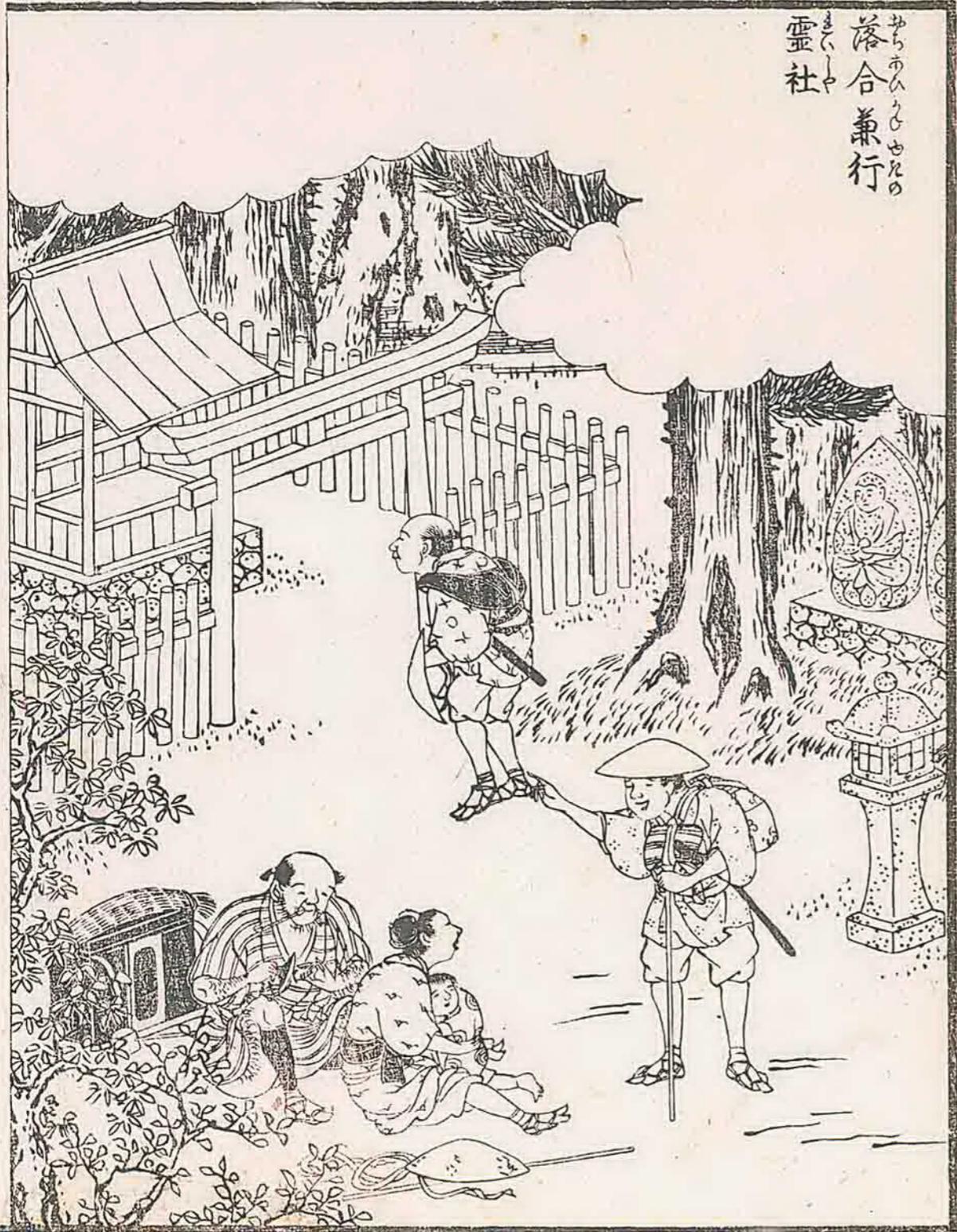
土産

○勢川驛

諏方祠

勢川驛

わらわのういせいの
 落合兼行
 霊社



本曾路名所圖會卷之三目錄終

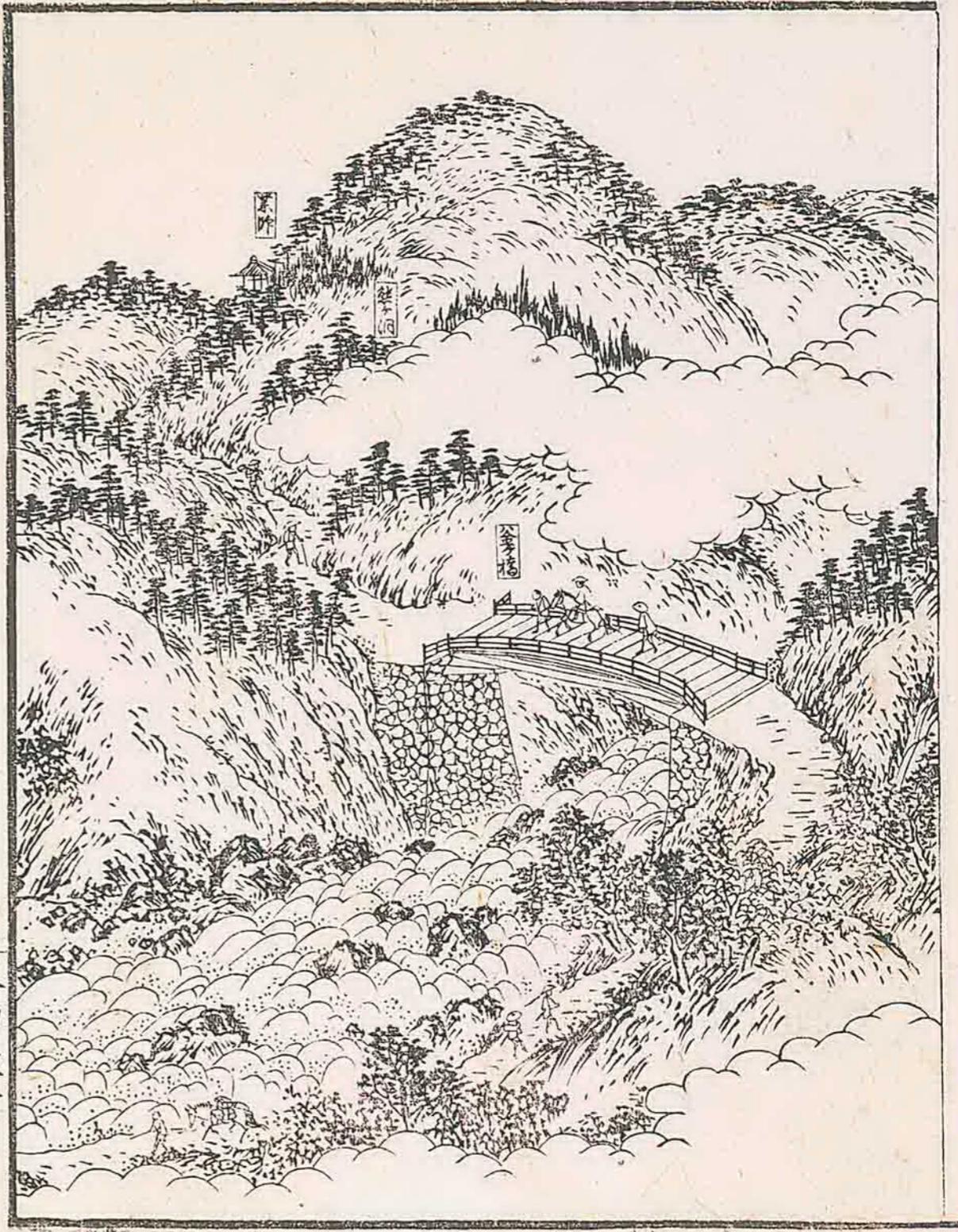
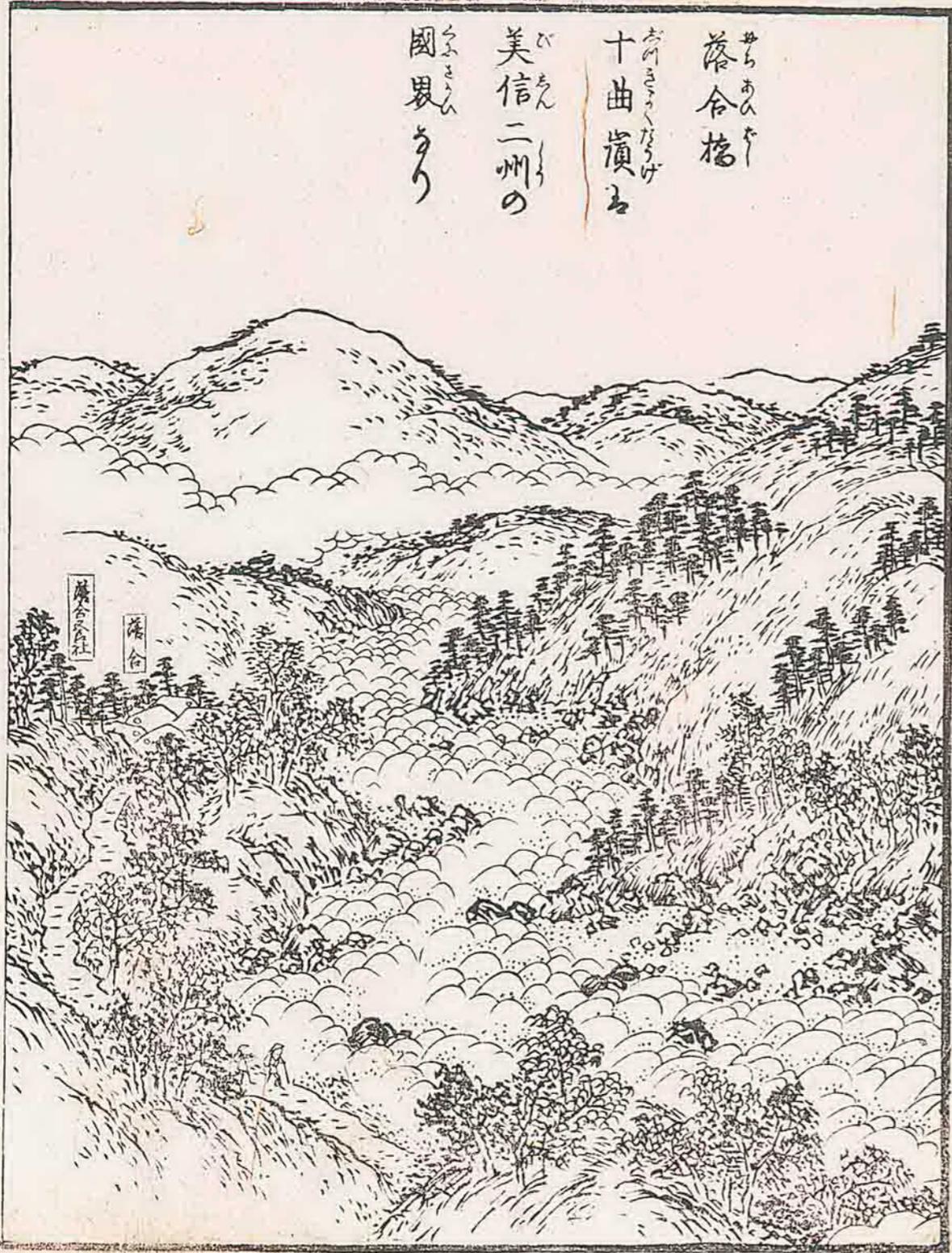
○ 觀音寺
 千村後改家
 五月日橋
 黒川温泉
 箕池山
 西野
 氷湍園道
 本宮殿墓
 ○ 幸山
 吾光寺乃
 塩尻

鶯着寺
 荻曾
 衣更着網
 山神祠
 烽火臺
 黒澤
 土産
 兼遠墓
 幸山親音
 桔梗原
 塩尻嶺

○ 洗馬
 犬飼清水
 浅間祠
 御嶽権現
 崩越古城
 小子墳
 駕疲嶺
 索川
 諸獸
 柳篋橋

熱河四郎宅
 土産
 秀綱澤
 鏡棚山
 地渡澤
 御嶽山
 岩戸権現
 三浦山
 義仲馬洗水
 阿禮神社
 大岩

落合橋
 十曲濱
 美信二州の
 國界あり



木曾三二

木曾路名所圖會卷之三



馬籠まで一里五町は宿と若竹炮を製して清るぬあ糸
いみし(落合五郎兼能とくし者居後の地あり駅の通
方小杉の大樹多くある林あり其中小落合五郎が靈と云ふ
洞ありは宿賤し

落合橋 宿の入口にあり金ヶ橋ともいふ双方より梁が出しく
十曲嶺 坂九折多しを名に呼ぶ

美濃信濃堰 堰あり

霧原山 霧原より東北二里許あり山中一里餘平地なる地
ひくく一民間を耕す小一ツの壺を得たり其中小嶺七八
千疋養ひて其の毛を織り其の皮を製し其の骨を焼く其の
實あり其の皮を宋銭にしてを平豊翁志豊之術傳照嘉
定大觀政和
拉の文字あり

御坂山古道 濃州大井驛の北千駄林より本宿路よりふ文宝二年
本宿路をゆくといふは街道より園系を経て伊奈郡小玉ふ

木曾三二

萬葉

知波夜布留賀美乃美佐賀爾怒佐麻都里

伊波負伊能知波意毛知知我多米 主帳埴科郡神人部子忍男

後拾遺

志く雲のうらり足ゆるあし引の山は高根や津坂なるは孫 能因法師

夫本

信濃打付芝の阿く野うらりれく本宿の津坂へお糸く小なり 夜多因大臣

續後撰

志ふれちや本宿の津坂を小篠原分り社もかくや意乃兒 後中御末老房

新十

谷風本雲こそせのわれ信濃路やふせれ津坂乃夕立をんを 千惠法師

古事記

日本武尊條曰越科野國言向科野之坂神而還來尾張

國云

景行紀

倭武尊信濃より美濃へ出るとて大坂の坂を越ゆると兒食於山中

山の神白蛇麻と成る津茶よまてなる依藤をりてまてさうけたる

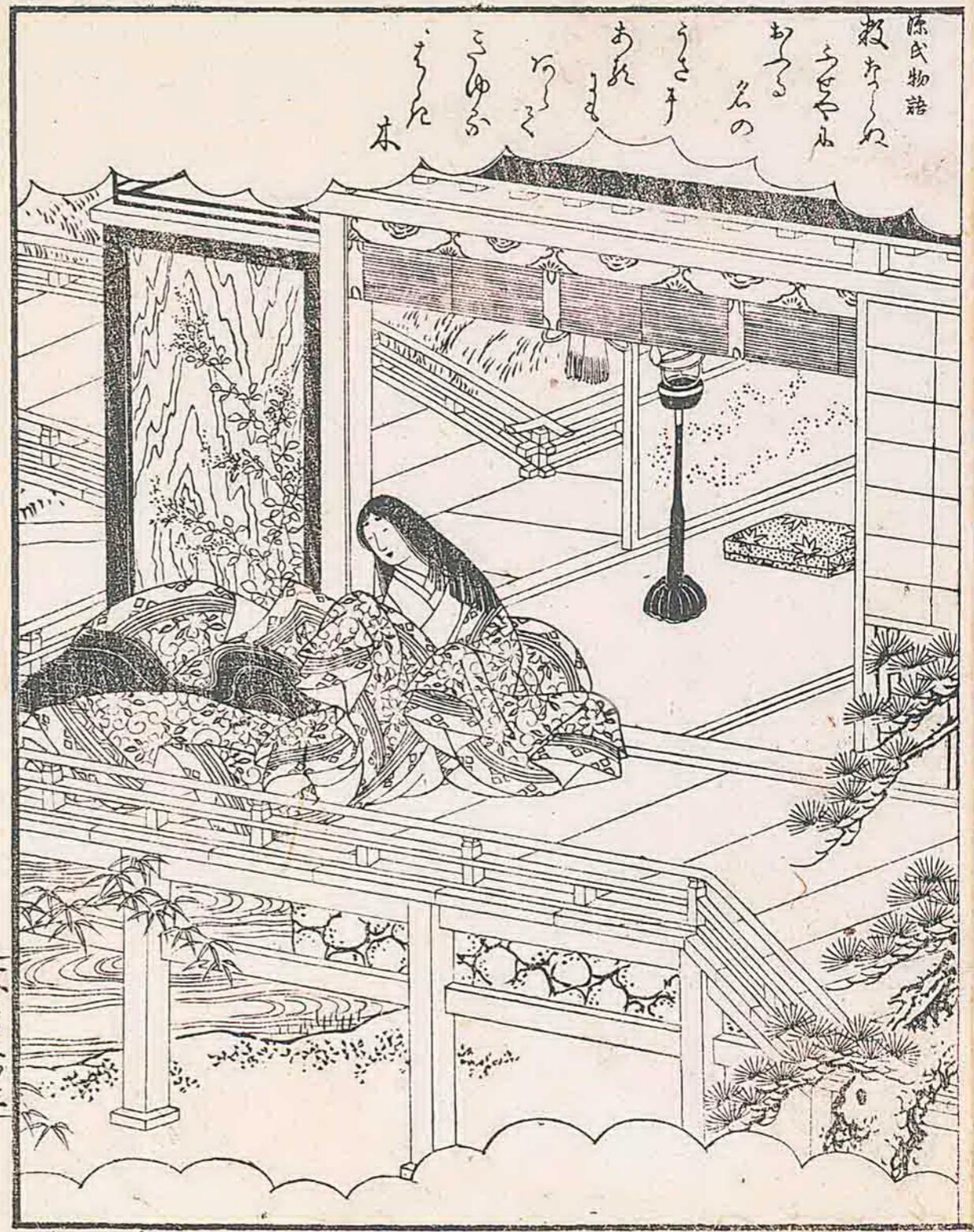
これ目小あさりて倒まぬと終り衆信濃坂と越るそのおけく神

氣よあさりてく煙ひる本け附く後藤を驚く人及び牛馬小塗を

おのぼる神の氣本あさりてく又曰る山中に道を失ひて多し小



月夜本堂
 英波の
 信濃の
 玉舟新小
 あり
 森の
 帯本城
 迎く
 かなるり
 急乃奇よ
 孫光と



源氏物語
 教乃
 うさ
 名の
 うさ
 あれ
 うさ
 うさ
 うさ
 うさ
 うさ

三ノ
 三ノ
 三ノ

白狗導を我状ありて英法本出のふと云く

今いひて信法守藤原陳忠と云く人ありたり

元方の二男なり云五任國畢て乃れ上より下りし時坂と越り同本多の馬

た小翁を養ふ人の家なる中に守の業よりなる馬と棧橋の積ま

本を後足成りて踏折る守遂にぬ本馬は棄あがら落しぬ屋をい

たくも志は保たれ守生さくあまもま守の叫びる物

いふ事遠小遠く聞ゆれ其家よりあるの虎孫何處を宣ふぞ聞く

云ハ藤原小繩長くはあて下せと宣ふあり彼れ守の生て物小留

里で清まるなりなりと知く藤原小多くのこれ差繩どもと取集て

結びて結終と云れくと下り中畧守藤原小多くと被絡よと

と云皇朝七十代の後までも神坂の嶮難男より下り棧橋はひ

の橋のてくみみ棧橋を結く大藏連をよそて柳とて近世なる

方一本を架て是と後變りて編道の狭きと補ふる所なる谷

今この樹原の系村に宗祇のいたる中畧英法信法の國開ふありとい

本卷三ノ四

これより一説あり真田のれく小ありて十の系

かると今と云く城のてくせよなりとせ

とくきこれ指やのこれなりと云くその系と云くあり

そはと云くや伏屋小生ると云く本の有といふと云くをね君

ゆくと云くせあられも何と云く常本の云せけつりい喜は

伏屋里

藤原の中にある田屋をいふと云く信法ゆん宛をやりて坂のてく

或云云が小家なりと云く上より下りてありは藤原の先なり

其地は信法ゆん宛の下に小家成造りといふと云く宛のてく

と引て伏屋と云くその系と云く藤原のてく宛のてく

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立

妻問為家武勝壯鹿乃云

又廬八燦ぬせをのすれい何或と云く返ふせあともあり賤る家の

と云くて地みうふせと云くぬれぬれと云くあまんと

常本藤原の小信内藤の意より見渡せばははるあまの山のうちらに

はあつりの坂城たくとくを源林と云く藤原小天を利を平

或人かたりける一とせ受領すく入く山本谷とのり幸育し小
 ひくらの巨樹あり若かり教丈如く上り石積よそさみ立く
 又他本せたり並で櫛を高く高しあやれ樹るれ谷とあては小郷と
 たて、おつら物を隠れ本とくそとせけ幸いささだるさるさ
 兼好法師菴 住しとく今勢原の中に後後を安と称さけあり兼好せ
 猿猴せ音使通るるり山中の者誰と
 鎌倉街道 今勢原を結く勢原山中用く所の古より久しく後
 て復通る中が遠山氏とて者あり濃州遠山の莊を領けけ
 時鎌倉將軍の代をけ道より鎌倉へ通れ又甲州武田は乃
 経く河を渡り
 濃列勢原入るなり

馬籠

妻翁すで二里 駅中南北三町
 其好民居山中に散在に

皂鵬巖

駅の西山上小あり其好皂鵬の岩集るる
 故本名とく信英二州をん開かり

下阪川

下流湯船渡り小川なり

諏訪祠

熊聖権現祠にあり

永昌寺

後長福寺に属す

本巻三五

丸山城趾

駅の西小あり丸山堂稱れ又駅の南小此山とくあり交と
 茲本云の岩と築く

破蘗路

これその一折なり 焚川すで廿一里の間水動へ流る

千歳

れそ翁や本翁けけらの丸本橋を足る彼小庵を居たれ
 本賊うれさその河さぬ袖ぬきてみるぬ翁もむと致危

新勅

中く小のひもと好て信法を教本翁翁の橋たけつるやふせ

後後撰

甘ひさう言の指法もてゆくちぬ花む本翁けけけ

後後撰

かへ本翁の橋たえく小舟を急ぬれ幸々も去る云

新後拾遺

云もらと下に立たふけけのけつるふ言れ本翁のやむら

新後拾遺

ふも程本翁翁の橋たあ中ふ張志りてや舟のき後らあ

家集

とむ月のうけ小さつる山人のいてはるあはれ孝のうけ

本曾川

街屋の左小流大川あり河中の石
 大さうして取るく魚もそくか

足せそやかいう信法の本翁路河君よ思ひの海さつる

從二位 行衣卿

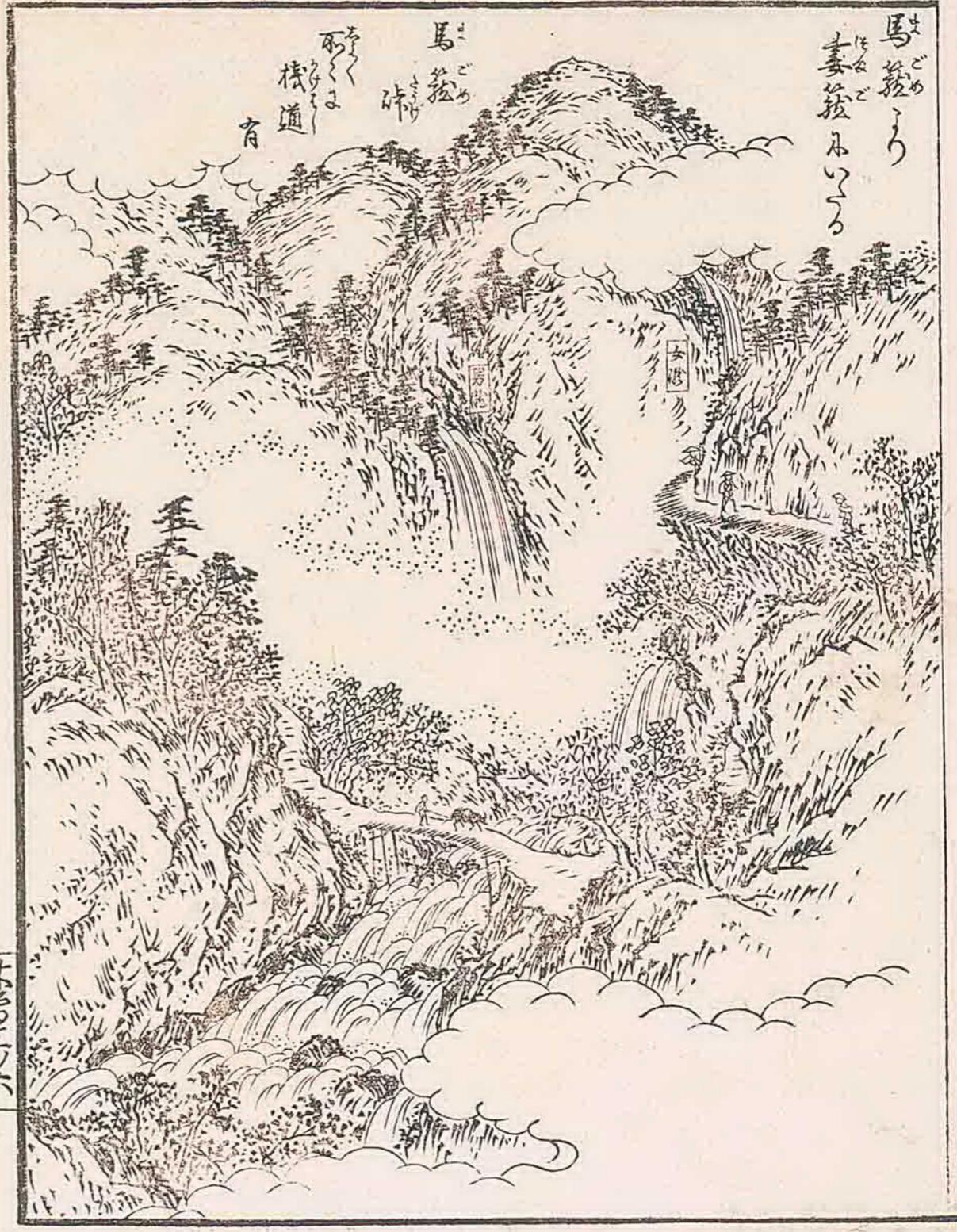
從關關傷秦丁力
 棧道斜通驛令前
 峯多蛇繞踏曉霧
 樹深影魅泣霜天
 蟠石不掃分軍夕
 驥足欲就陷澤辛
 楚老何圖當日事
 禾蕪一曲隔風煙

霍山烟雉籠



馬籠まごり
 妻籠つまごり

馬籠
 棧道
 育



木考三六

妻籠古城 馭の東にあり城址現存以天正十年本曾義昌之將を築いて

山村良勝築いて之を小居とむ同十二年秀若公本曾義昌を討つ

修永路を禦く義昌兵筑良勝小増して妻籠城を築く時小住宗玄

郡主管小大膳諏訪保科を兵を令せ本曾と義昌と欲以志小蘭の

若を拔く妻籠城と攻ふ良勝士率小令とて鳥銃を放ちこれを防ぐ

修永軍登る夏を得む退ひく遠巻りく且水道河割城中水毎して

白糸をそのく馬込洗ふ敵を退く城中に水沢山より城壁して拔座

かたんとて軍を退けく修永は小居が良勝伏兵を設けく之を討つ

士率死亡する者多し若治大子殿走は廿は良勝の功状書に

鯉巖 妻籠の小山にありあり

烏帽子巖 形似る烏帽子の形あり

兜巖 右小嶽ふくれ

風越山 飯田の西にあり妻籠に入て修永と通ふ所あり

本巻二ノ八

千載 風あり城の中をえられの村ありや修永の屋敷あり

詞花 風越の岩はくまて見ると修永の屋敷あり

夫木 手向もむきひくゆり風越の尾に植ふ小松

新六 かくて月と見るとさくら小松吹てあね風越の

十五百表 さくらむとらの榊は咲にさくら小松あり

古木曾嶺 飯田界あり

松樹澤 飯田の西にあり古松の大樹ありて其の松樹の

修永二年三月十三日 霧を以て焚毀むこれ小住の

兵隊を撃つて修永の兵を撃つて小住の兵を撃つて

其時の射殺の痕あり

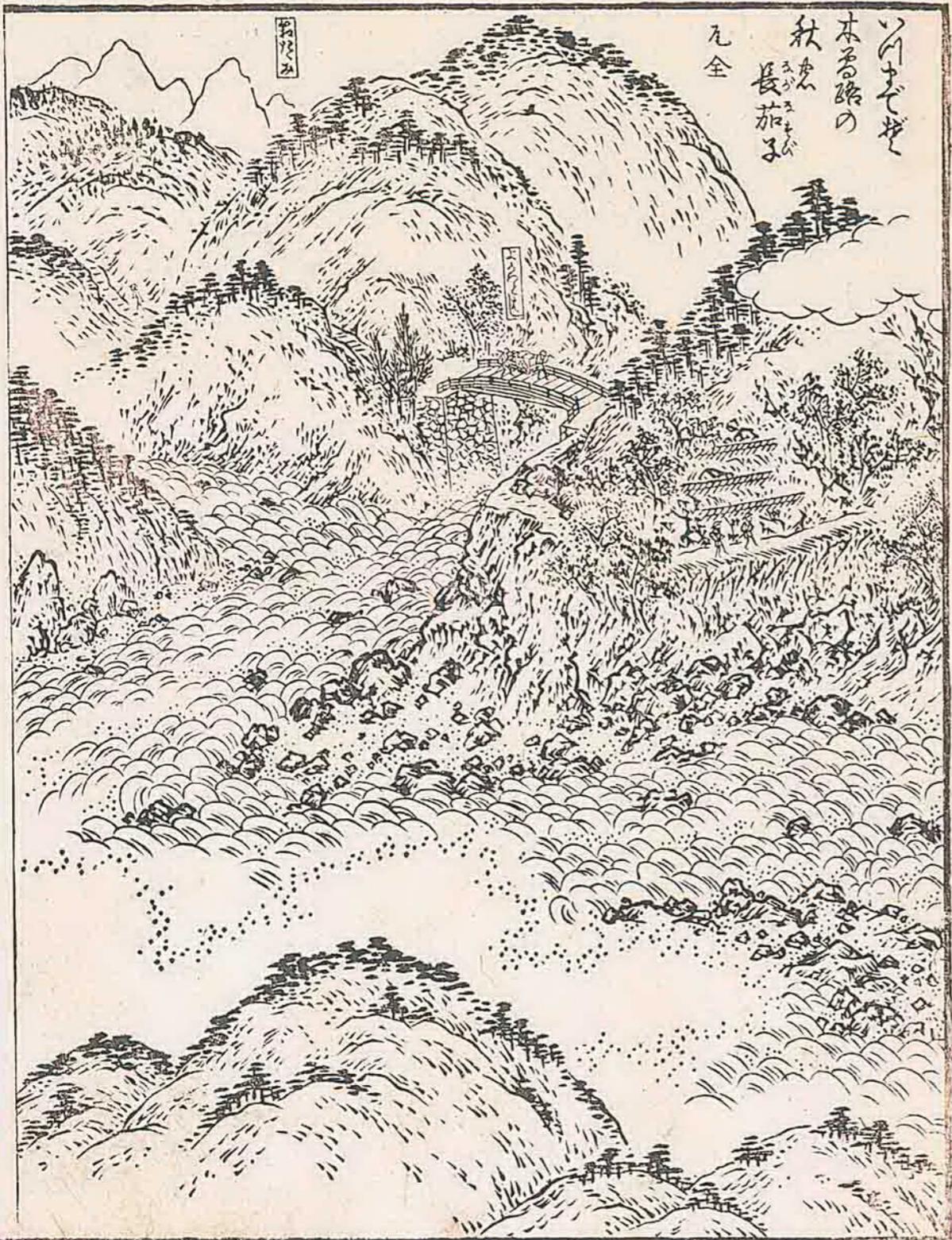
信濃 三田野

聖屍中二里才 馭中南北二町好む相対して巷に本曾路あり

みか山中たり名ありわ源山を谷より岨付く小住の

統中三留聖より聖屍中での間をわたりて道をあうけ間左を殺十回

浴に本曾川は踏の狭き所を本を伐りてく並べあう



山の上で
 本居路の
 秋
 長茄子
 元全

山の上

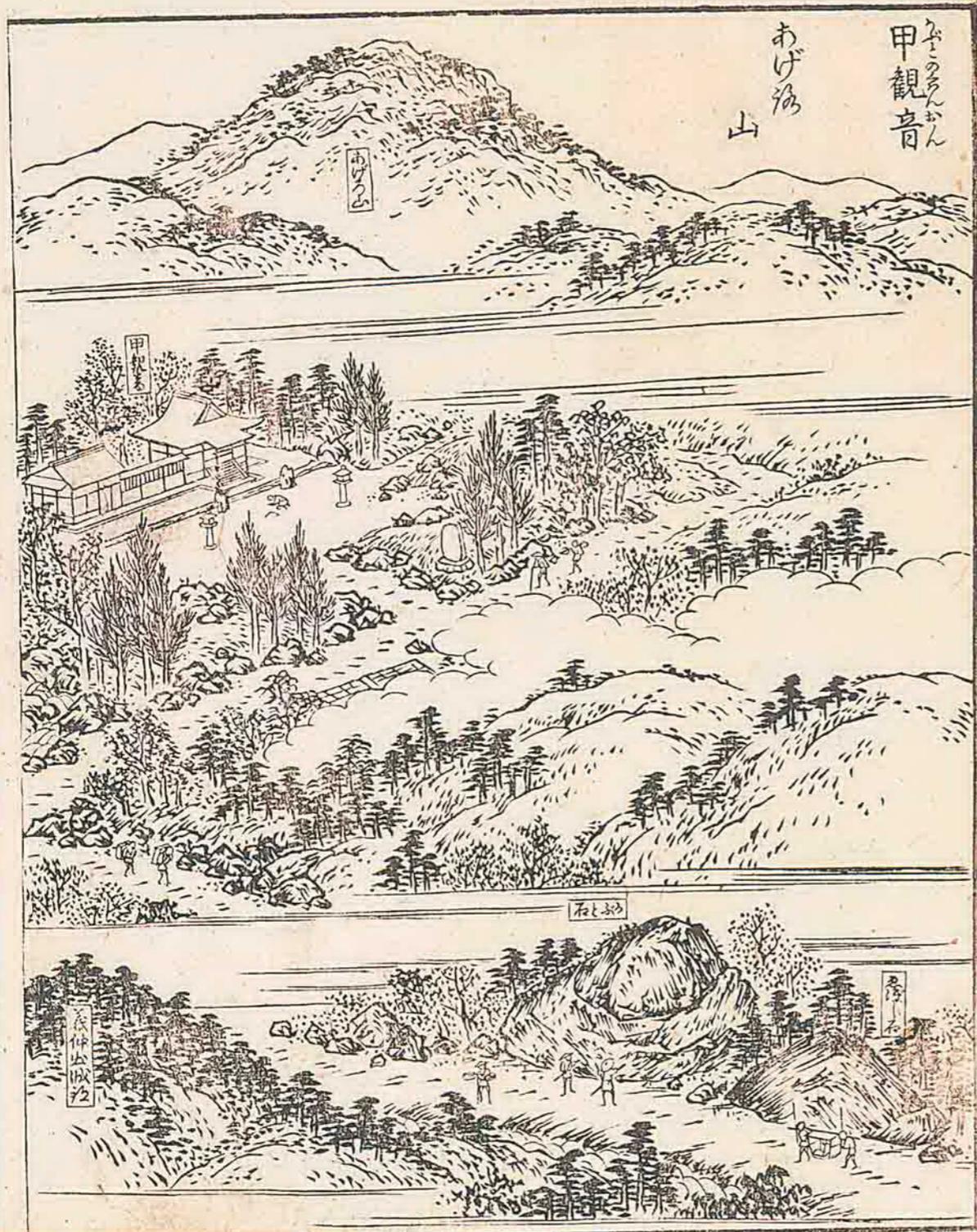
山の上



三富登より
 聖尻まで
 船く峻
 踏し
 核道
 多
 新法拾
 雲もか
 下に之なる
 うひさの
 けさる
 本居の
 山
 深頼具

山の上

山の上



かく見街道は狭きを補ふ右と左の山を屏風状にたてて
 其の中へ奈文巖の如く路を遮ふ此乃小橋乃まゝいづれも川の上
 にけりふ橋ありあはれ碓道の絶ゆる所よむけたる橋あり他國ふち
 くるうたふけに移りし山の尾崎坂鳥のく岩口へ入る先の山
 尾崎坂まゝの所より其若道は横つて溪川の流る本若川小橋合
 所よりこれ小くふ橋さればあやうた事甚しは間中橋とる所有
 其向ひ小垣友とる所も何り其ありり溪川一流来りて雙方の間
 に大岩あり其系なり

園原生の碑 神戸の東にあり天明三年これを建ふ
 牧澤橋 横川戸橋 羅天橋 いづれも樹樹

伊勢山 伊勢の西小川(河)を隔りて里流る天正十年
 奈岐嶺 嶺の東にあり又一名嶺比谷とるふは奈岐嶺と御嶽とお嶺
 揚籠山 神戸の西より嶺人登るまされり奈岐嶺の近所小窓ありは中

本巻二十

廣さ約十歩其内小方式三丈の平石ありて種茂山姥の石座と
之傍人足跡山姥の謡曲小声をあげ給の由也これより
牛頭天王祠 住吉祠 白山権現祠 若宮祠 劍祠 熊野権現祠
俱小三家聖小

等覺寺 三雲和尙を創し 曹洞宗 日晃山と号し信州松本全久院小属に

觀音堂 神戶の觀音と稱し馬頭觀音安ん村民香火を指ぐむし

岩戸觀音 千石の傍に安ん

名産和合酒 酒の味極佳愛をば

三富野邸 馬のあつ一の阜山あり給ふん城山と号し本若義仲の子孫

年中將軍尊氏小属一武功

本曾古道 細目久田見蛭川高山宿松坂率小いりりこれ信州小属

是其古道ありいづれの代より交易易いりるありん

三富野より魚小坂羅天坂をえり清水村みりりは間世町

許あり皆みむ中極村坂をて尾城の農家に到り十二極村

より駒ヶ嶽嶽見内には時雲城峯に戴きて風色斜あはりて
坂をえり芝山下左家より聖尻の駅みりり

須原までき里二十町は駅いりり一里路里中書以駅中

東西五町餘相對して巷城あり其路山間小散在に

飯盛山 飯盛を盛るる

本若大河 三反聖の東よりりり城をく上松小いりり水流奔

騰して其聲雷霆の如し大雨の時水漲りて畏るべし

牛頭天王 鹿島祠 白山権現祠 住吉祠 諏訪祠 俱小村民

妙覺寺 須原中あり勝寺小属に

野路里右馬助家益家 年長とある文禄元年豊太閤檢地の時石回備

本若彦左衛門致春 奮小笠原の族人なり國孫本若ありて氏と

怪に其子孫歴代里番とある家小古甲曹乃び

太刀一柄あり長サ三尺三寸許極先く奇他なり

野路里館 野路里館の南にあり今城山といふある時古徳一行を鑿掘り岩あり古甲曹の朽敗をたおろし人老古城の證といふ

長野 東山道の中にあり駅次本非に民居を山に依りて住居を

今井四郎兼平城 其麓に古徳の址あり今井といふ山頂小城址あり

本曾殿館 村に後三ノ宮小居に其後三ノ宮の遺址あり本曾殿

小居に後三ノ宮小居に其後三ノ宮の遺址あり本曾殿

其頃子小園を設け英法を所せし合戦勝る事トて諸小入

野路里館 野路里館の南にあり今城山といふある時古徳一行を鑿掘り岩あり古甲曹の朽敗をたおろし人老古城の證といふ

長野 東山道の中にあり駅次本非に民居を山に依りて住居を

今井四郎兼平城 其麓に古徳の址あり今井といふ山頂小城址あり

本曾殿館 村に後三ノ宮小居に其後三ノ宮の遺址あり本曾殿

小居に後三ノ宮小居に其後三ノ宮の遺址あり本曾殿

其頃子小園を設け英法を所せし合戦勝る事トて諸小入

辨財天森 本居川の

河満橋 橋本川小架長七同半

磐出観音 伊奈川村の上あり幸馬頭

叔聖尾の宿成るく左本居の大河を見く長野村の天長

院尔蒨一中傳の岩よ本居一まん辨天を遙か一弓矢村の古

関門と見て杖をければ同の坂嶮一色平沢ひく田中むく城

経く大橋村の今井四郎が城址を見端橋村より伊奈川橋子

町を須原の駅本泊に

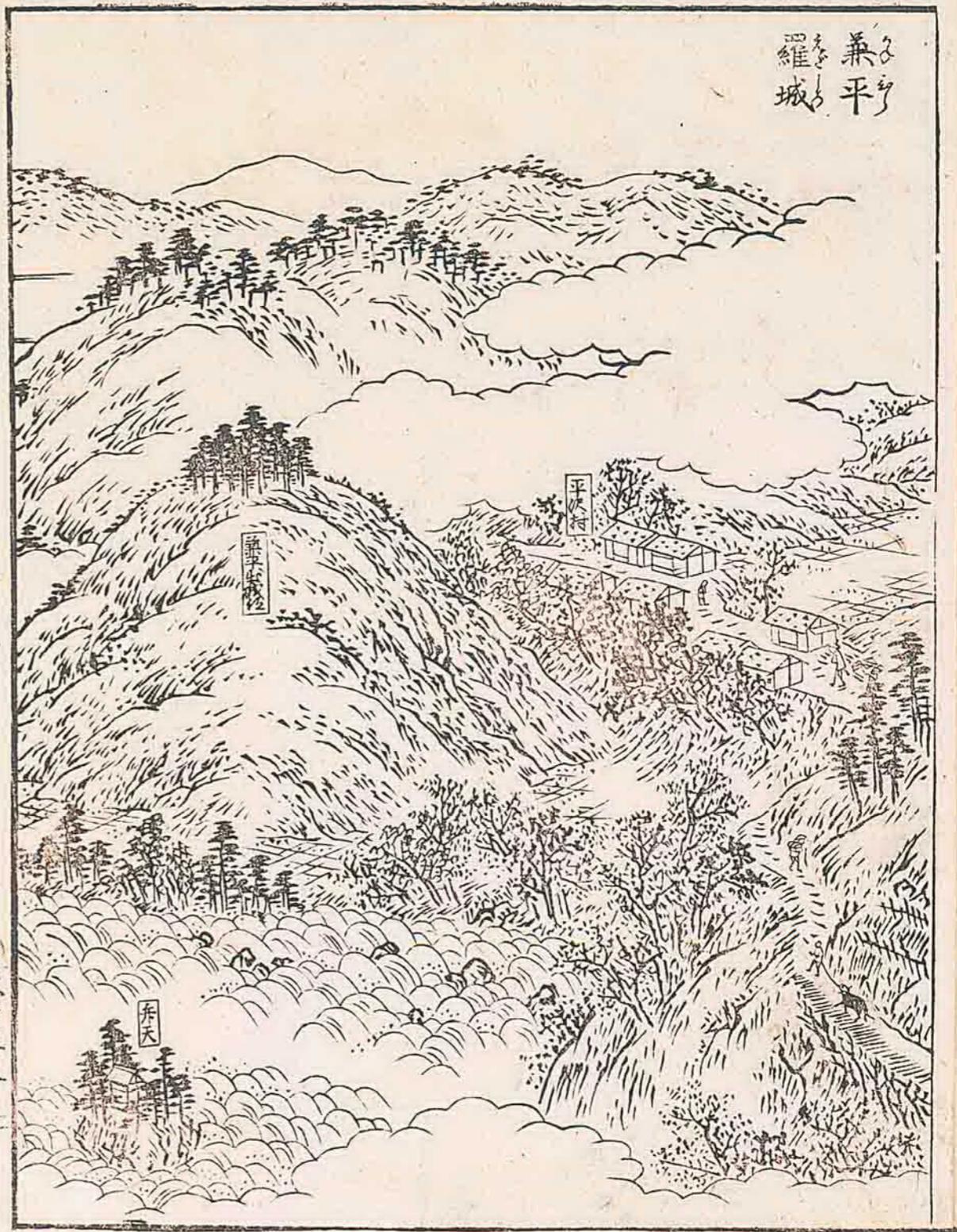
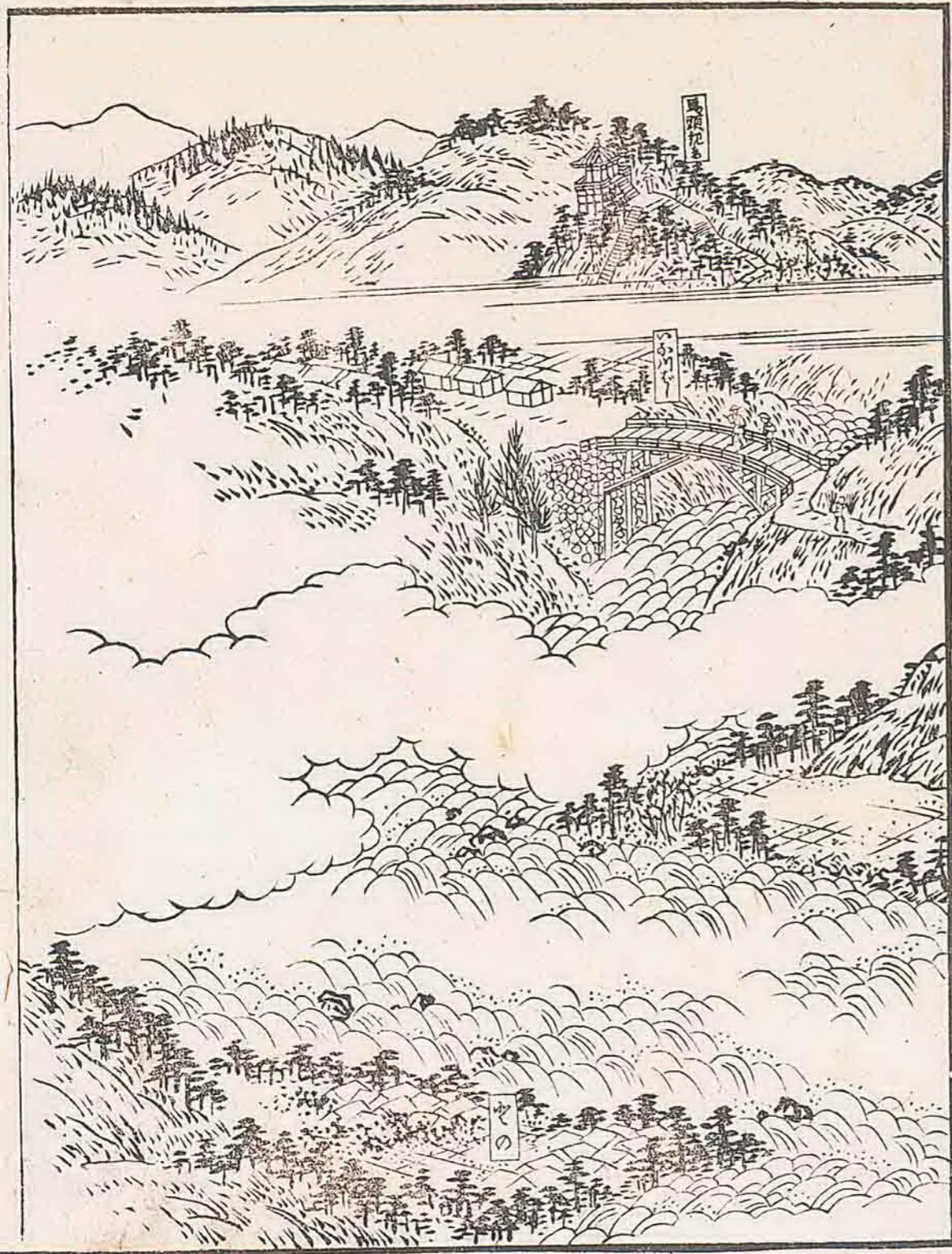
上松まて二里九町東山道駅次なり東西四町併お對して巷を

かん土産緑綿は色に諸村蠶紙巻入幸多し

伊奈川橋 三重中岡大木本架に最壯觀より後世石をそく崖に

浄戒山定勝禪寺 須原の西にあり藤原

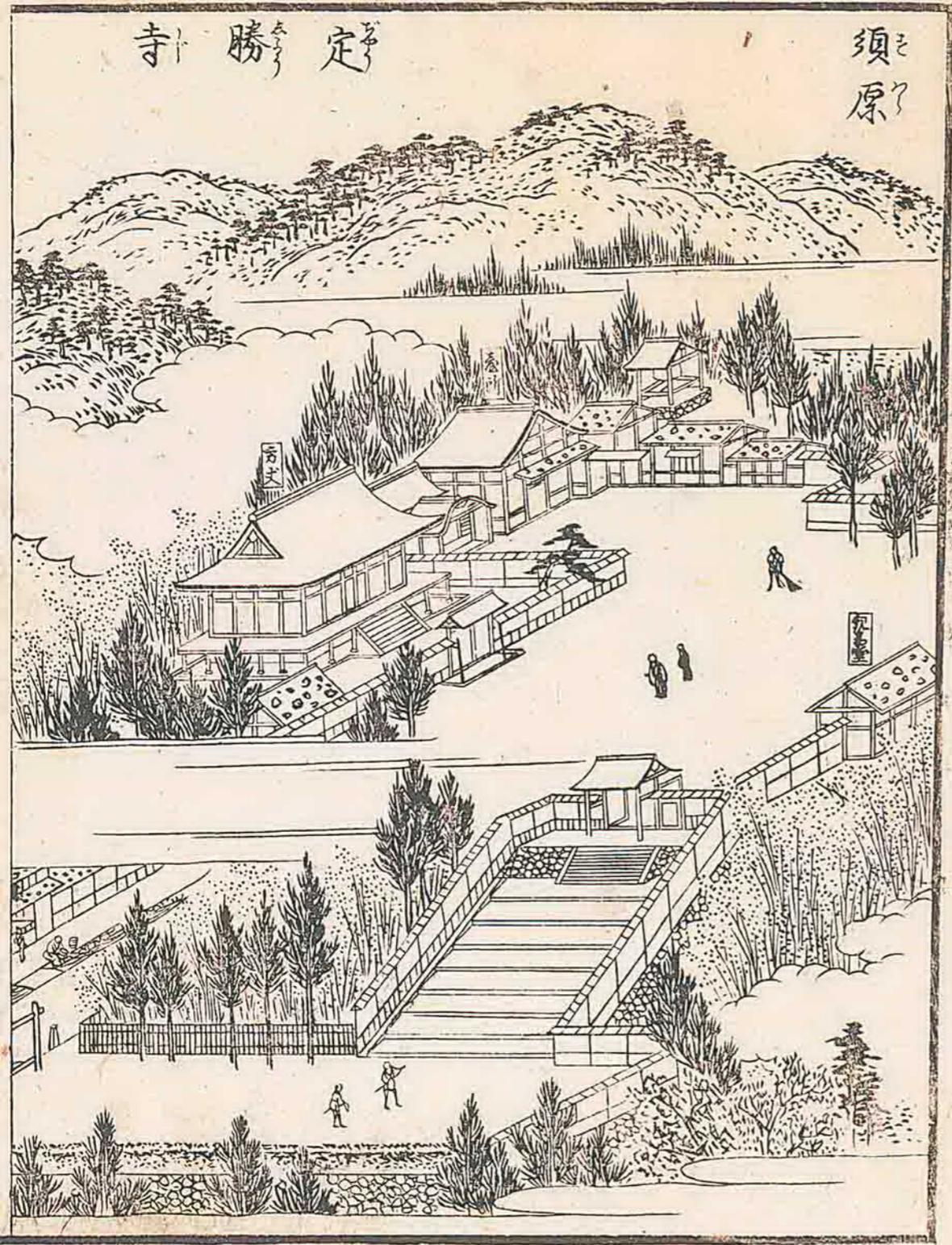




本巻之十二

須原

寺勝定



本尊釋迦佛木香檗 十一代之源本尊
 十王堂小あり 鐘樓内

鐘銘曰

山色登樓詩興濃
 千鈎大器響珍重
 群生試聽斜窓曉
 醒夢聲聲百八鐘

天文十八癸酉王林聖贊誌

遊年住持慧章其鐘の破壞を補く大徳法清
 温繁像一幅

寺俗云天正十年本義昌濃州をうけり
 義昌が種ふ愛若軍はあつては
 寺に寄附に其画大幡ふふ

董思恭画 釋迦 普賢像 三幅

唐画 墨梅 一軸 懐燈 奇 仙入像 三幅

唐画 出山 問答 圖 一幅 屈原 漢父 解の圖あり

古画 龍虎 二幅 豐之肖像 九京大夫義元之肖像

左京大夫親豐之肖像 九京大夫義清寄附

其好尚多しこふ器に

左京大夫親豐墓 寺内あり墓上あり大樹の傍あり
 鹿島祠 これををある
 其園に式尊許

澳原を出き小沢ひく大洲村より本若川より大洲あり其地と
 半たれど松ひく本ひくも溪川より流れありと橋あり南む
 番場村これに溪川の橋あり隣倉倉卒立町より茶店あり
 立場あり宮の堂村らわら村を過く萩原にわたり

小野 龍 小野村の右の路傍あり
高三丈許直下本若川に流る

は瀑布泉と山洞より霞をたし人共布衣はくせしがく落ふ
 侍小石像の不動尊ありまは細川玄吉の老の本若越より死
 小本若路の小聖滝堂より布引無面をくも母とくともわ
 やいさぶこれ程の物乃此國の奇松ありふそしむる哉やと書
 且つかり真水雲花く素練派とれる石小噴びく明珠と散に
 とくは所の事とるべし

小野龍

ふ光川橋 本若川より長十五間南より
 寝覚山臨川寺 寝覚山あり
 本若川に橋ありは色特小急流なり

奉尊釋迦佛 岡山活山和尚

辨財天祠 尾州身四代

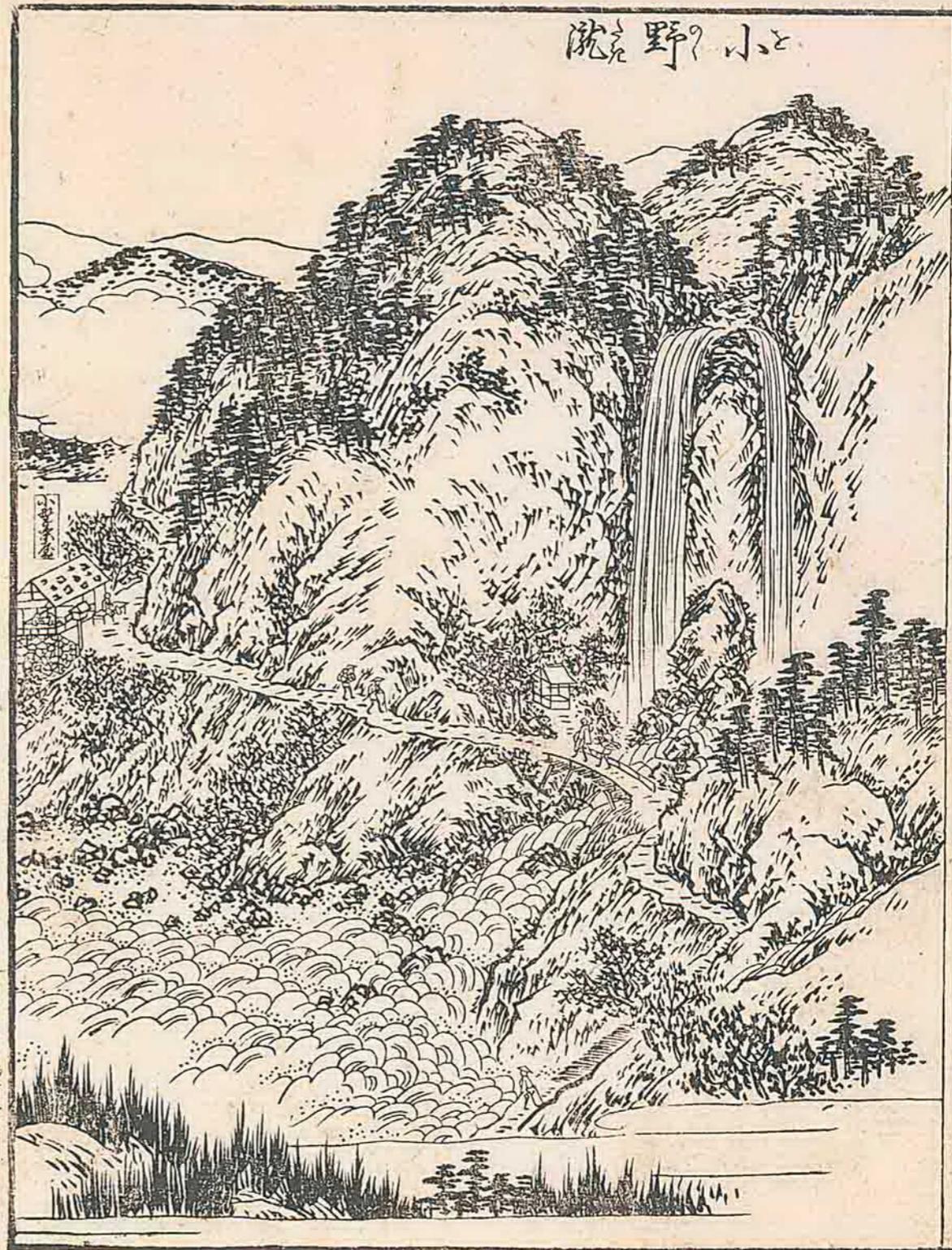
木曾八景
 寝覚夜雨 棧道朝霞
 小野瀑布 德音晚鐘
 駒嶽夕照 衡川秋月
 御嶽暮雪 風越晴嵐

寝覚林 尾州の家臣あり
 寝覚の床を藤川寺の茶裁のこころ岩間をたしてて

みちあり其道それとけり福さ免の床と本若川の汀
 あり大岩ありと横と十回長四十間をうり有こ本若川
 いと狭き所なれを遊覧してふさぶ水のさぬ目もなほめく
 地を深さもけりてそは福さめを床とてくたつる

八景

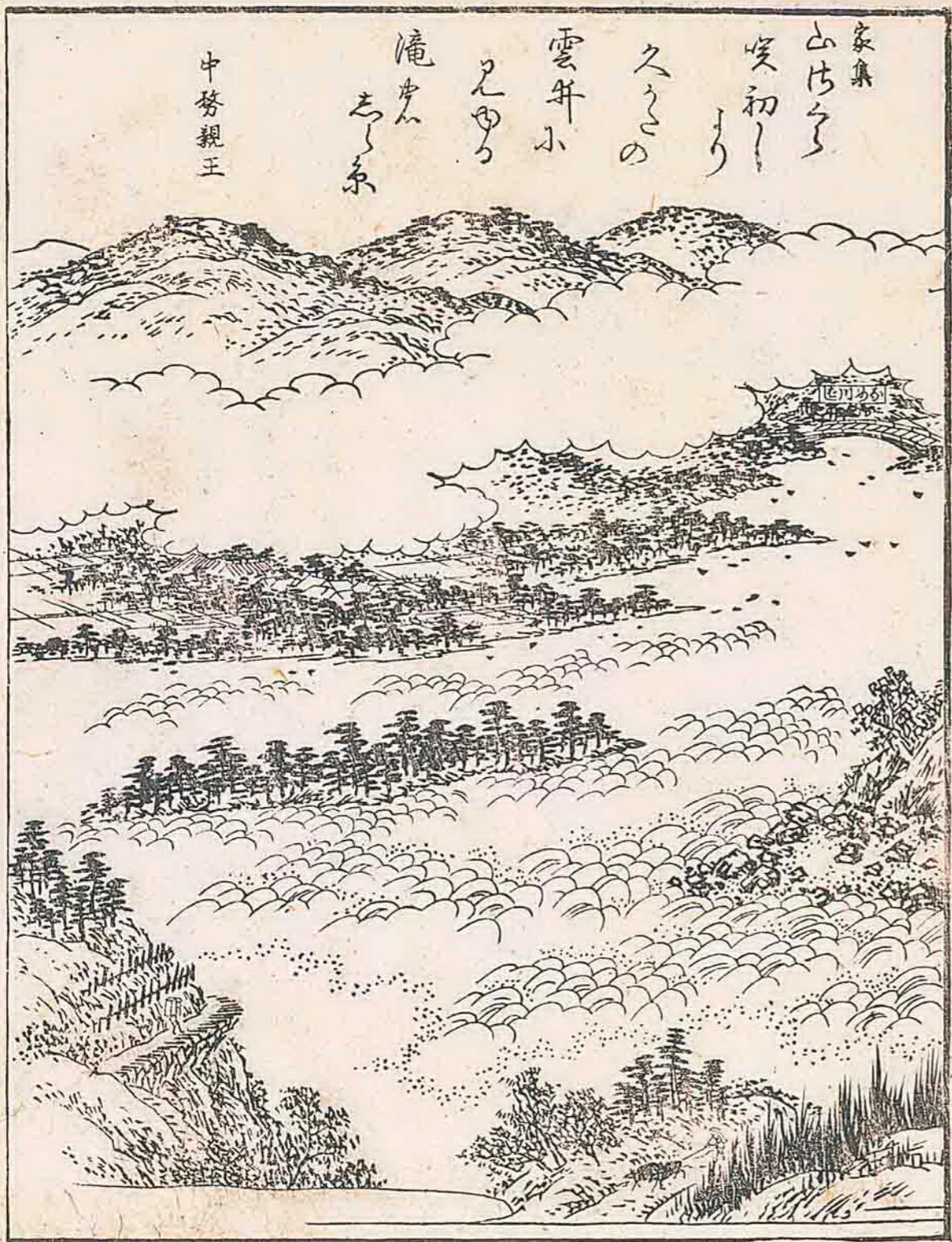
小野の滝



小野の滝

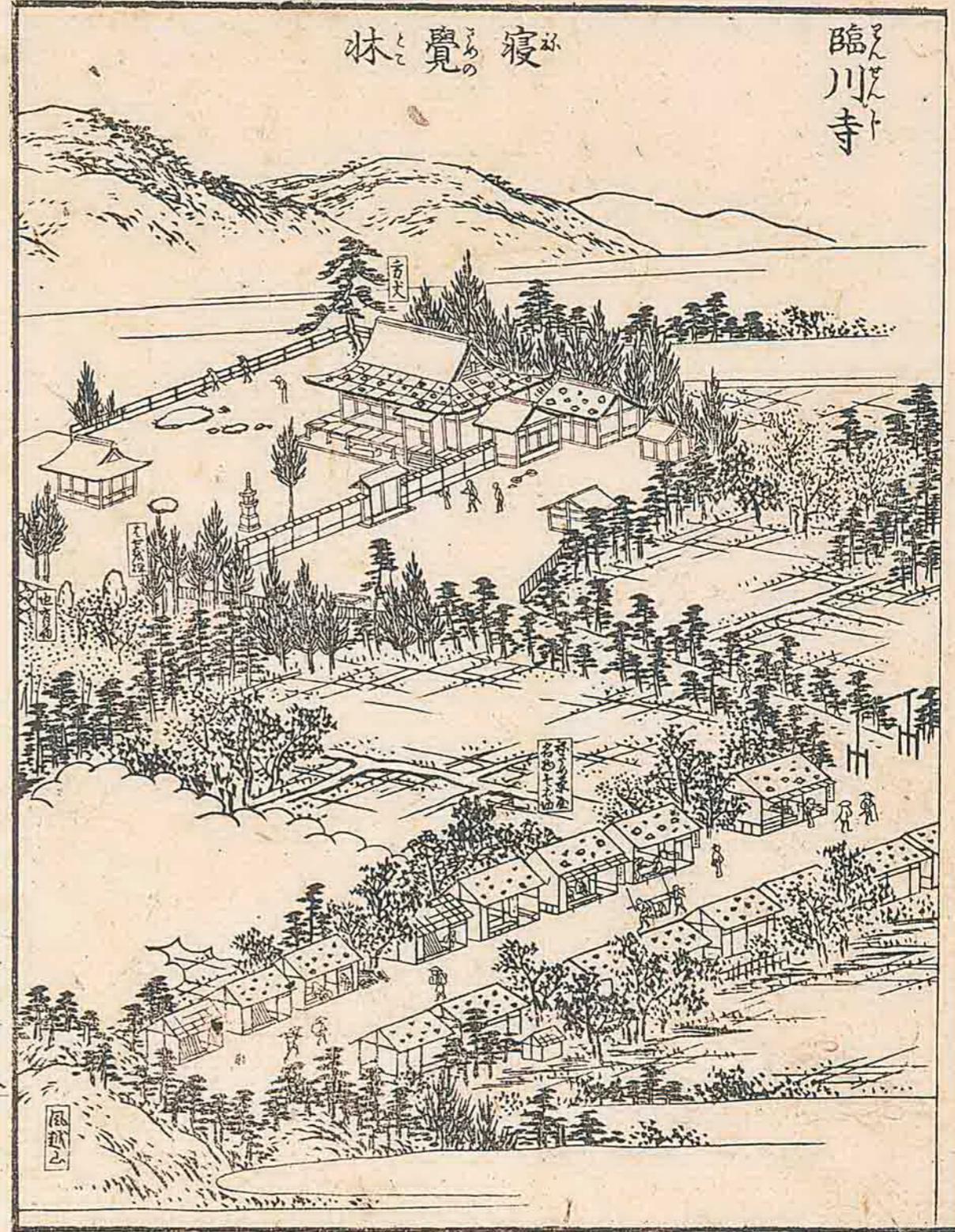
家集
山はさ
咲初
久々の
雲井小
滝中
志系

中務親王



臨川寺

寝の覺の林



風

岩 安堂
あも
杯さあ
て
あ
月
あ

蘇島



獸類皮店

本番の山中は色々
東子多し

何川新瑞城なる小態の皮席の草猪を皮靴靴の類ひありて然の
爪百も毎粒牙など多く出りてこれ等を店所々ありけり
猫昨朝夕山小特獲これと製しあふ出たりゆきう人
これ成来く本番の名産と云然を六雄將軍の瑞もきりて
多くの草店若にひるふ言も又喜よ小見也

観音堂

観音堂 建今小瑞城ありて洞像が得る一巻と

阿弥陀堂

阿弥陀堂 親親對人第一世如信上人の画を所し

氣比祠

氣比祠 鹿島祠 神明祠 徳利氏 松乃祠

三飯廻翁

三飯廻翁 困居 弘治年中此人ありて世業を厥し

は本番の山中に居し不老の薬成る人ふあり其頃の名醫なり
あつたる山中奥深く入る茶と証これを製し茶味を調ふ
世に三傳せり謠曲も此人をせり良方の名をよめと愛小若ん

和極集上下

新撰之方

小兒諸門

當流大成捷徑度印可集

啓迪菴日用灸法 治肺氣通藥之部

諸藥勢揃藥組之方并諸療

當流依門下學主懇求 辨證配劑

合九卷

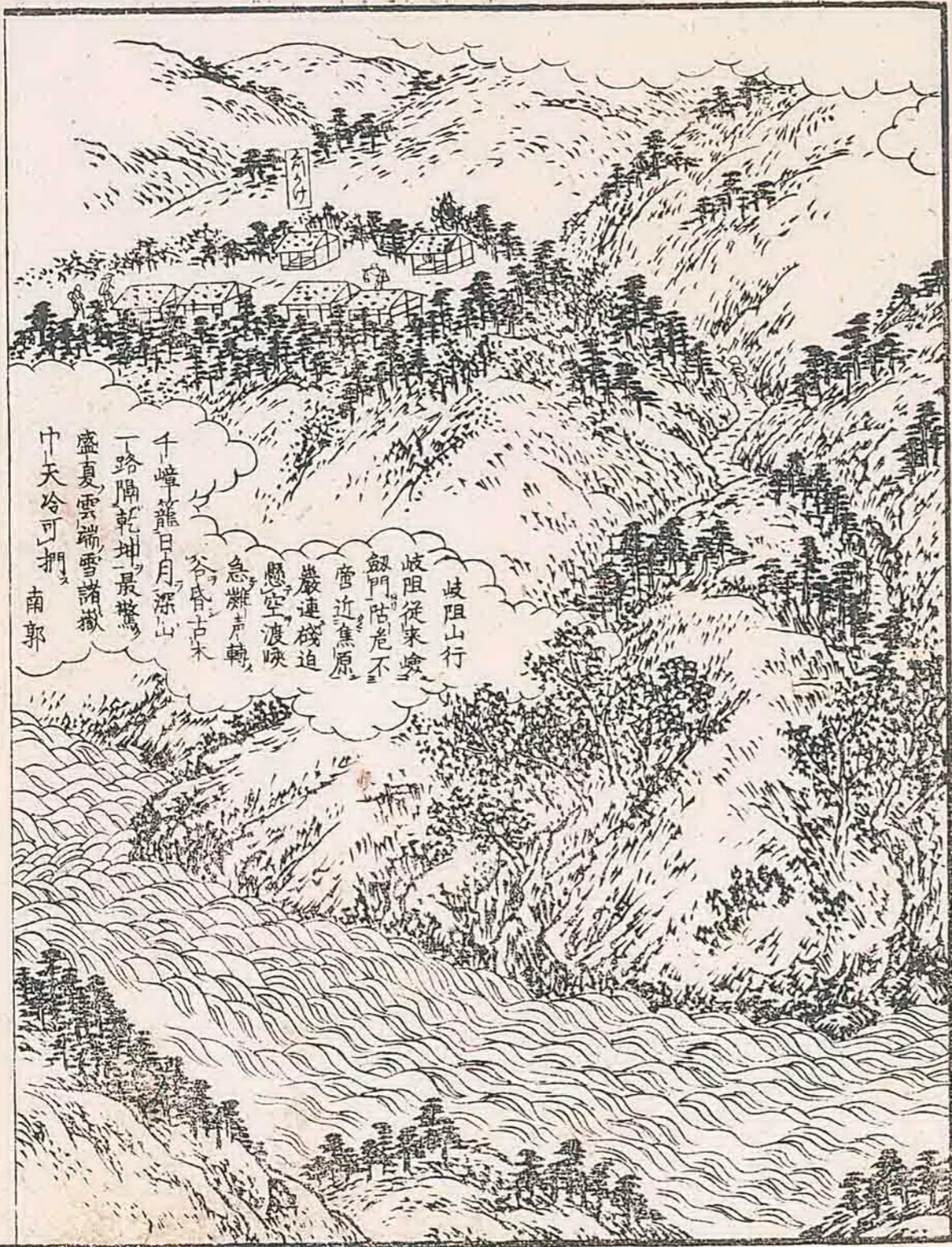
弘治第二丙辰十一月十九日夜組之

信濃上松

編海まで二里半 駅中南小五所相着して巷城あり其峰山
間小散坐して住居は駅都會の地あり商人多し繁昌也
地より駅の小新茶屋とあり終式三家有り蕨餅を嚮て

名物

本曾棧齋跡 慶安元年尾州 有司小倉トて左右より石垣を敷十丈築上棧屋と階兒



岐阻山行
 岐阻従来峻
 劔門危不
 唐近焦原
 巖連峻迫
 懸空渡峽
 急灘声轉
 谷昏古木
 千嶂龍日月深山
 一路隔乾坤最驚
 盛夏雲端雪諸嶽
 中天冷可捫
 南郭



上松より
 福海の洞小
 棧乃の旧跡
 わり上の
 山は街道
 ありて
 棧乃の須
 はあだつとせ
 後世今のめく石と後て
 橋も短く儉と
 かせ
 命と
 苦
 かせ

今世素安穩なりと種を岐許橋より長巻二間許新巻
更かく橋下の石小流あり

此石垣慶安元戊子年六月良辰
成就焉畢

又寛保元年辛酉十月吉辰

御嶽川

級瀨の所に石の方より別み大あり川流れゆる谷あり藪系ま
密より流るる本谷の幸谷よりとあり
御嶽川の本谷の御嶽より其谷の奥良材駁一福橋より其溪
の川上も十里許ありは河の流まゝて材本多く出付は河上の方
本谷は御嶽より大ありと高き山あり西北ふあり
はひふ雲まきと山あり予さ月の末に通るる小い谷と雲より富士
浅間ももろく流るる河のむづ一道の石本御嶽の石井あり幸溪川
を御嶽川に合されを合流と名づけは所より御嶽見ゆそれ岐嶺の
山中に材本多き事よりよ及ん檜楡松榎多し杉もあし
標も多しして石井流をい故小川下へ流る事ありけり

一本巻三九一

真本特小多し又山中も道の側本橋の本多し大樹あり葉も朴

の本に似たり枝もまきまきととびと終り実ありと柿もれとと土民

これをとりて粉めし餅として飯小宛く食用とてを飢饉にまはく

其本は横文ありて器物小可なりととも尾州君より伐ふ事と禁

制してそ終ゆ候はは家臣民の食物小きゆかたを材本を伐ふ

松人を尾州君より和泉紀伊辺江の人を備へ遣ふる毎年春末雪

消二三月も山に入ると十月も物九幾千百人と入幸候とて其山

入ふ松人まこと切りなど持て毎日引もさし以上方より本谷へ下付は松

人とも山中も家畜を居候と本谷樵材本に別りありは博小つり

長に尺許ある山本谷河へ流せはいつとも好くあふ流ひく流下ふ

河中の石小ありとそと流りたふと幾小垂るるその来りて流せ

松よりとと水もよく石高をた通はは流る本ども本谷と色て

英法の内吉田のに里川上小流織とて所よりけり本谷小大流と張て

一本も下(海)にせんとむらうてはつる業名熱田(下)に熱田
の中(西)の方(北)白鳥(東)より(北)の(北)所(下)に其地(北)より(北)人(買)取(法)師
(賣)き(法)奉(法)式(人)は(子)小(孫)織(子)居(く)け(幸)成(司)務(織)及(所)あり

本(名)は(く)流(れ)本(と)る(幸)甚(く)制(禁)之(は)故(一)本(も)給(与)あり(と)我
御(嶽)と(す)六月(十二)日(神)事(あり)尚(興)小(幸)一
御(嶽)鳥(居)中(野)村(あり)石(造)の(形)あり

本(曾)大(河)は(色)岩(石)嶽(鬼)と(す)又(幸)奇(勝)以(後)所(成)鬼(が)御(せ)
名(は)亦(く)流(石)と(す)一(石)首(土)取(之)は(又)幸(く)奇(勝)以(後)所(成)鬼(が)御(せ)

御(室)軍(起)小(河)傳(云)高(念)文(義)仁(親)王(兵)を(起)一(平)氏(を)討(つ)
を(起)一(河)の(念)文(義)仁(親)王(兵)を(起)一(平)氏(を)討(つ)

小(教)主(は)本(名)若(中)第(一)の(豊)饒(の)地(より)而(馬)京(都)江(戸)等
宮(越)す(一)里(半)駅(中)東(西)七(所)お(對)して(巷)成(る)其(俗)山(間)
小(居)其(遺)跡(あり)ん



本(名)三(廿)二

分(の)地(より)系(より)級(降)す(六)十七(里)福(降)より(江)戸(五)十八(里)也

福(島)關(隘)馭(の)右(の)方(小)津(番)所(あり)は(所)女(也)
萬(松)山(興)禪(寺)馭(中)あり(所)係(宗)妙(心)寺(小)属(は)
幸(尊)觀(音)又(華)峯(親)迦(の)迹(と)安(は)

鐘(樓)稻(荷)祠 愛(宕)祠 義(仲)墓 俱(小)塚(内)あり

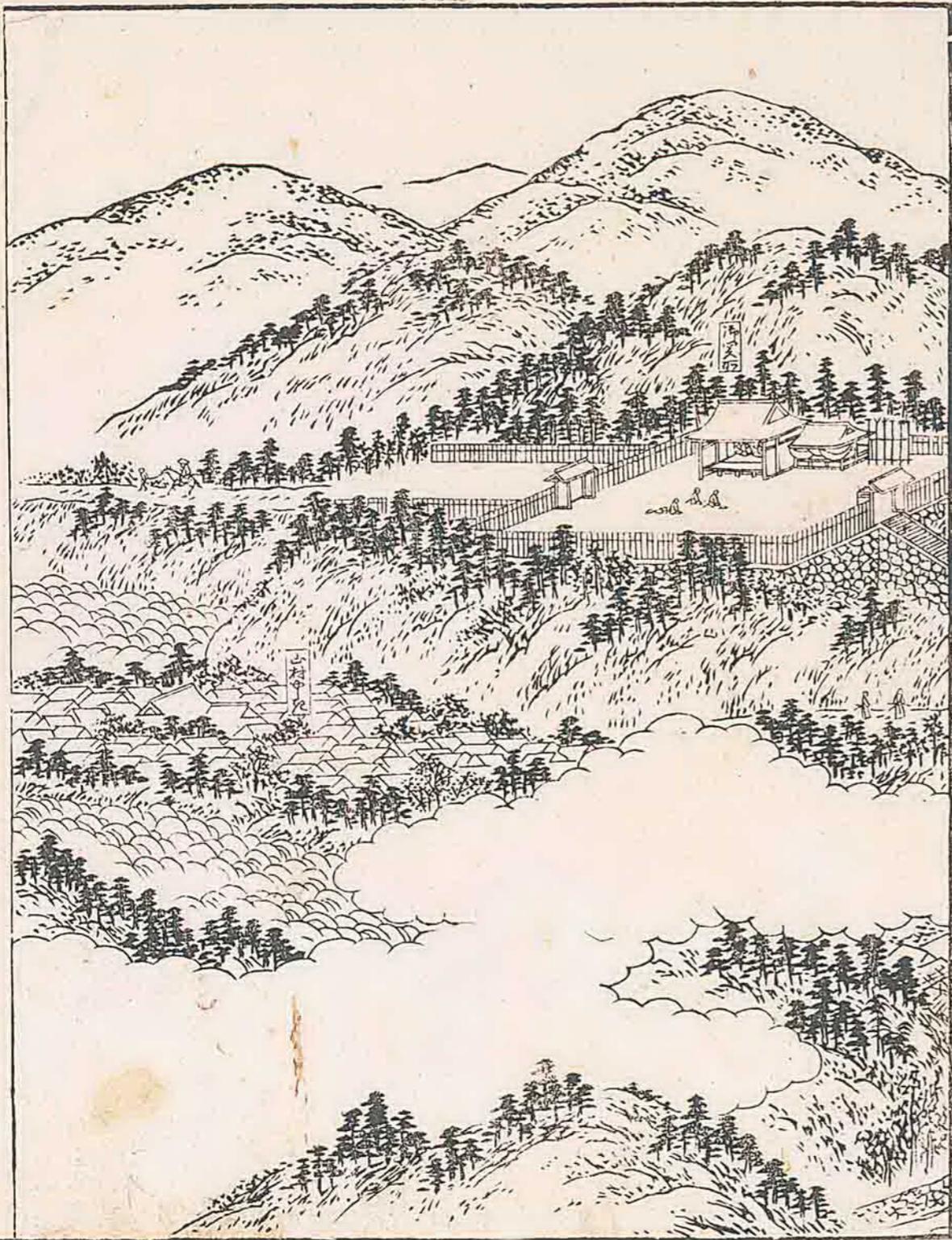
什(寶)

朝(日)將(軍)義(仲)公(乃)四(天)王(の)肖(像) 三(幅)

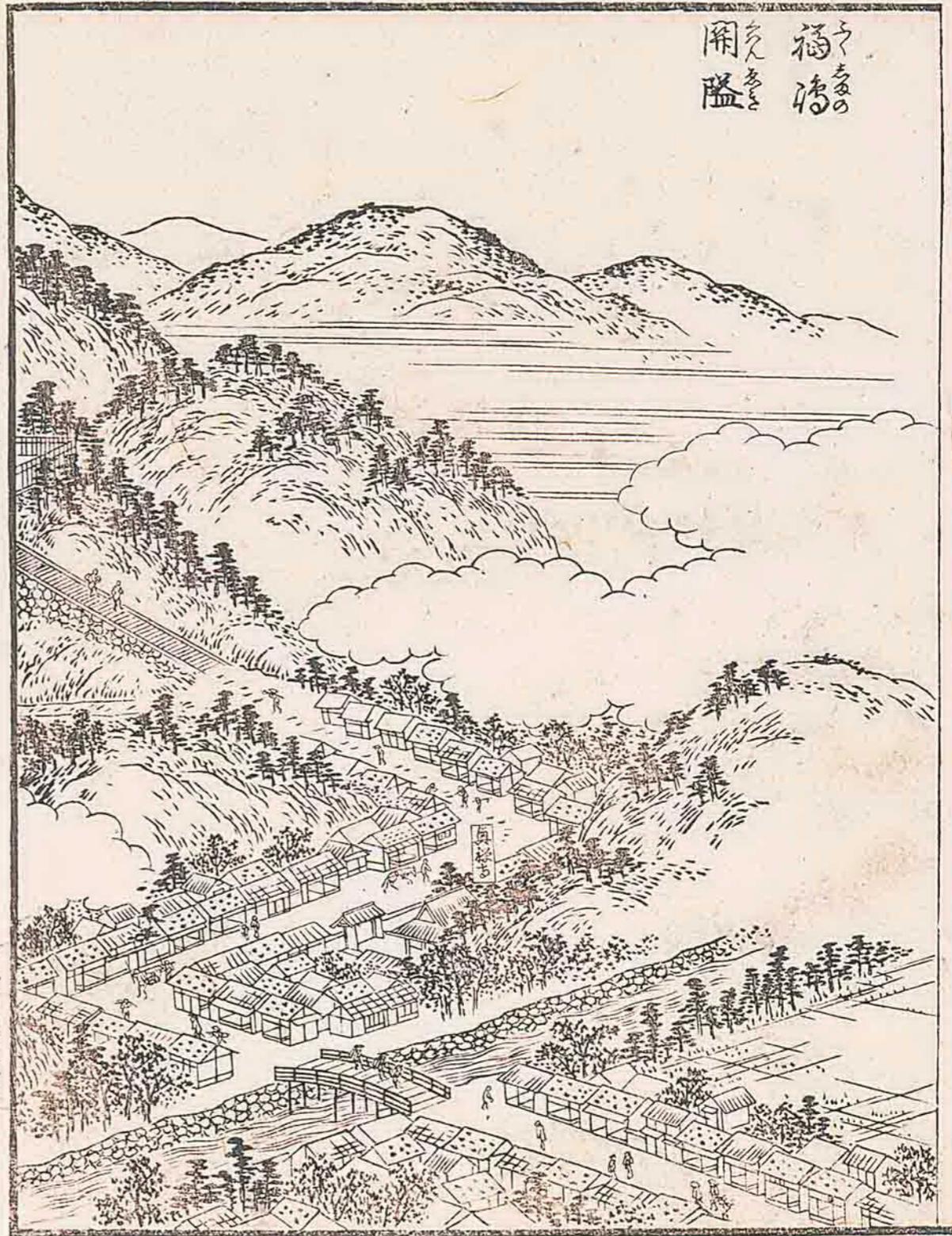
左(吏)房(覺)明(書) 一(幅) 其(外)教(品)あり

龍(源)山(長)福(寺)馭(中)あり(所)係(宗)妙(心)寺(小)属(は)初(本)名(源)を(即)豐
文(字)の(標)派(あり)て(燒)火(以)後(の)文(字)の(如)く(又)大(炬)火(を)
負(く)竿(頭)小(布)を(著)く(經)を(寫)す(鼓)拍(く)寺(内)城
や(ら)る(是)を(布)引(と)り(是)を(信)通(公)の(善)提(と)り(て)孟(蘭)盆
會(の)遺(念)なり

本(曾)殿(の)乘(鞍) 二(具) 朱(漆)髹(細)八(指)の(魚)形(は)其(一)則(也)
撒(金)菊(桐)の(紋)あり(其)外(馬)具(ホ)あり



福清
開隘



木
三

義康古城 驛のありありに三峯及び驛也

本曾肥前守義康家譜 左系大主義康の子なり頃承りて味成りて小

鐵田信長と率兵二十餘年小及べども若く敗走せし本馬
の威勢は時盛なり武田信玄が誓をむさんど和を講じ

本曾左馬頭義昌家譜 義康の長子なり後伊藤守と号し武田信

長と率兵二十餘年小及べども若く敗走せし本馬
の威勢は時盛なり武田信玄が誓をむさんど和を講じ

武田信長父子大軍を率て甲州小入る武田勝頼父子を
斬り武田を滅し三月十九日信長上野原に勝頼を討つ

寺小陣に流兵十萬騎義昌を討つ天正十八年豊臣秀
賞北条氏討つ平らぐとて義昌を世々本馬小孫と先

名産 駒 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

赤真 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

河鹿真 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

岩奈魚 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

名製 執蓄 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

凍豆腐 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

凍糕 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

諸薬種 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

駒嶽 本馬の流傳小率あり其駒を愛これをも術駒を
り其後に於

と征伐して軍城めらじ諸將小向りて是聞信州駒嶽小四百年來

以及ふ神馬あり

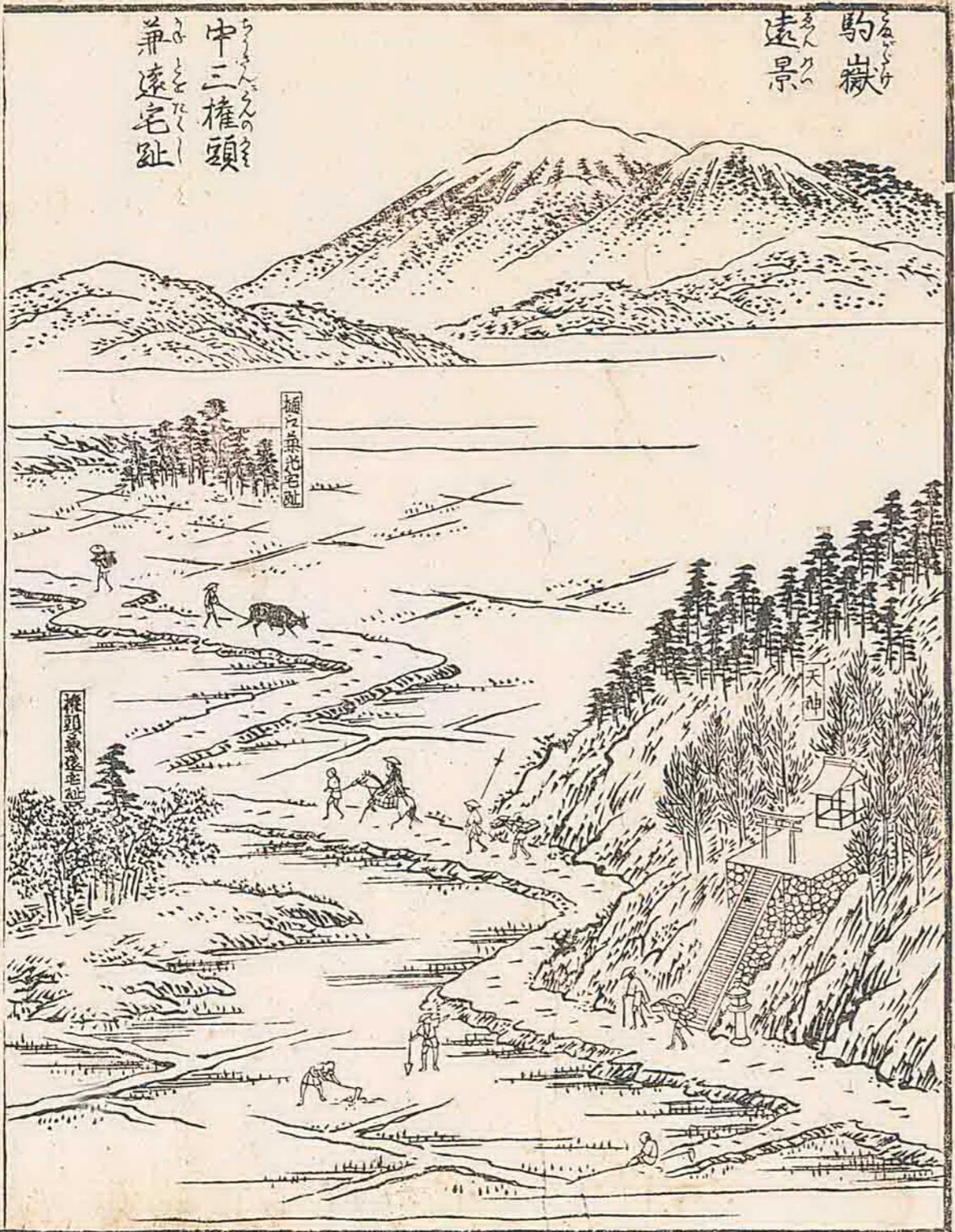
天平十年八月信濃國獻神馬黒身白

髪尾云

斯の如く旧記あるは、本年、諸州の軍卒、集く、駒嶽と圍ん、これを、狩り、ん、也、思ふ、ひ、つ、此、石、之、將、の、面、士、乃、牧、狩、小、倣、ふ、な、一、也、餘、は、支、度、も、あ、り、所、其、年、の、六、月、明、智、光、秀、が、萬、小、我、せ、し、其、事、秘、す、は、山、中、三、峯、あ、り、二、の、内、第一、小、高、れ、を、大、嶽、と、し、移、く、大、山、を、り、及、本、遠、方、より、鮮、小、見、也、本、曾、山、の中、なり、山上、の、雪、六、月、土、用、の、末、に、消、く、八、月、又、積、ふ、駒、が、嶽、の、麓、を、大、原、と、し、其、前、小、川、筋、あり、駒、が、嶽、より、流、く、水、なり、駒、が、嶽、れ、山、脈、上、存、宗、宮、處、あり、其、奥、今、村、と、し、あり、て、龍、飼、山、と、し、寺、あり、寛、永、の、頃、飯、田、城主、服、坂、茂、其、時、の、陣、を、小、止、宿、あり、て、殿、色、の、八、岐、れ、森、へ、狩、小、知、れ、駒、が、嶽、と、隱、ん、く、詠、は、
ね、お、お、 尾、も、志、海、一、頭、も、冬、駒、が、嶽、か、ん、の、は、く、く、雪、の、も、や、さ、し、
中、三、権、守、兼、遠、家、
右、松、一、本、あり、これ、を、呼、ん、ぶ、本、為、義、仲、の、え、
服、松、を、今、枯、く、
此、松、が、か、を、と、ぞ、

本巻三九

駒嶽 遠景



中三権頭
兼遠宅跡

権頭兼遠宅跡

権頭兼遠宅跡

治義四年九月七日丙辰源氏木曾冠
 者義仲主者帶刀先生義賢二男也義
 賢者久壽二年八月於武藏國大倉館
 為鎌倉惡源太義平主被討亡于時義
 仲為三歲嬰兒也乳母夫中三權守兼
 遠懷之遁于信濃國令養育之成人之
 今武略稟性征平氏可興家之由有存
 念而前武衛於石橋已被始合戰之由
 達遠聞忽相加欲顯素意爰平氏方人
 有笠原平五頼直者今日相具軍士擬
 襲木曾木曾方人村山七郎義直并栗
 田寺別當大法師範覺等聞此事相逢
 于當國市原決勝負兩方合戰半日已

木曾三十九

暮然義直箭窮頗雌伏遣飛脚於木曾
 之陣告事由仍木曾率大軍競到之處
 頼直怖其威勢逃亡為城四郎長茂赴
 越後國云々

兼遠と信州本名の人あり姓中原故小本名中二と云ふこれより向小若刀先
 生源義賢其兄也馬頭義朝と不和あり武勇大義若小於之悪源と義平
 こ種を殺さ義賢幼兒あり駒王と云ふ後別由定盛抱を負く信若小
 仍兼遠小托以兼遠潜小書育して元服をさせ二郎義仲と云ふ活兼子
 中平家上皇女名羽の許之小押義高倉王義兵と起しゆ小討義仲王の
 令有城之と義兵を率内兼遠これと輔佐と兼遠小二子あり新謂
 樋口二郎兼光今井四郎兼平落合五郎兼行みか本名殿小随従して
 武名あり又一女あり巴といふ頗勢力あり
 峠殿上田村の民を結石橋といふ者あり其宅あり今に即り治を
 依むといはれし峠殿と稱して酒城と云ふと云ふと云ふ

峠殿

映あり村民之小これ其野原義仲とてに潜居しやふ

水精山 あり今に云く金満なり其地むくく水精山又令満を垣元

烽火嶺 本有川の西岸上あり福島の成山と相対を傳云本有殿

野婦池 越前守の西の麓にあり池三所并其深サ測ふべし其の

百姓其婦に教作とて親ひ見まは髪逆ふ立く類小肉角を

逐出を竟小平京に遊看して侍の柳と截く杖とて性未以教

時水面小機と鐵車と見其柳枝系を折ふ小竹今小玉川に池

研犬谷 麻犬年少く石壁の下に墜犬悲聲を案て麻と遊ふあり

斬蛇潭 本有川の西岸上あり相傳あり一農夫ありは

明星巖 本有川の西岸上あり相傳あり一農夫ありは

其地を斬蛇の洞とて其農夫とて其地を斬蛇とて其地を斬蛇とて

本有川にあり相傳あり一農夫ありは

本有川にあり

信濃 宮腰

萩原中二里又宮越くも書以歌中東西に町半相對

して巷を形を其好山同み散在ん

正八幡宮 里人云本有義仲は神前にして元服をとり

南宮網 一一村生云神

德音寺 本有義仲の牌を蔵む同墓朝日將軍本有義仲宣

本有義仲城 本有義仲の東にあり里人其地と

本有義仲城 本有義仲の東にあり里人其地と

家系と清和天皇七代の孫六條判官為義二男常刀先生義賢

義國之孫谷の館小あり久壽二年八月其兄義朝と不和あり其子

惡源去義平次して討平ぐむ義賢小二子あり其嫡子成仲家と

以源三位頼政事より子とて其次を義仲とて推名を駒王と名

けく父義賢害せし向村二葉齊藤別當盛盛と被瓜匿して佐列

映あり村民之小これ其野原義仲とてに潜居しやふ

水精山 あり今に云く金満なり其地むくく水精山又金満を垣

烽火嶺 本有川の西岸上あり福島の成山と相對を傳云本有殿

野婦池 越前守の西の麓にあり池三所并其深サ測ふべし其

百姓其婦に教作とて觀ひ見まは髪逆ふ立く類小肉角を

逐出を竟小平京に遊宿して侍の柳と截く杖とて性未以

時水而小機と鐵車と見其柳枝系を折ふ小竹今小玉川に

研犬谷 麻犬年少く石壁の下に墜犬悲聲を案て麻と遊ふあり

斬蛇潭 本有川の西岸あり相傳ふむく一農夫ありは

明星巖 本有川の西岸上あり頭注云

其地を斬蛇の淵とて其農夫と云ふ其地を斬蛇と云ふ

本有二九七

信濃 宮腰

萩原中二里又宮越くも書以歌中東西に町半相對

して巷を形を其好山同み散在ん

正八幡宮 里人云本有義仲は神前して元服をとり

南宮網 一か村生云神

德音寺 本有義仲の牌を蔵む同奉朝日將軍本有義仲宣

本有義仲及び樋口兼光今井兼平画像二幅あり

家系と清和天皇七代の孫六條判官為義二男常刀先生義賢

惡源去義平以て討平ぐむ義賢小二子あり其嫡子

以源三位頼政事す子とて其次を義仲とて推名を駒王と名

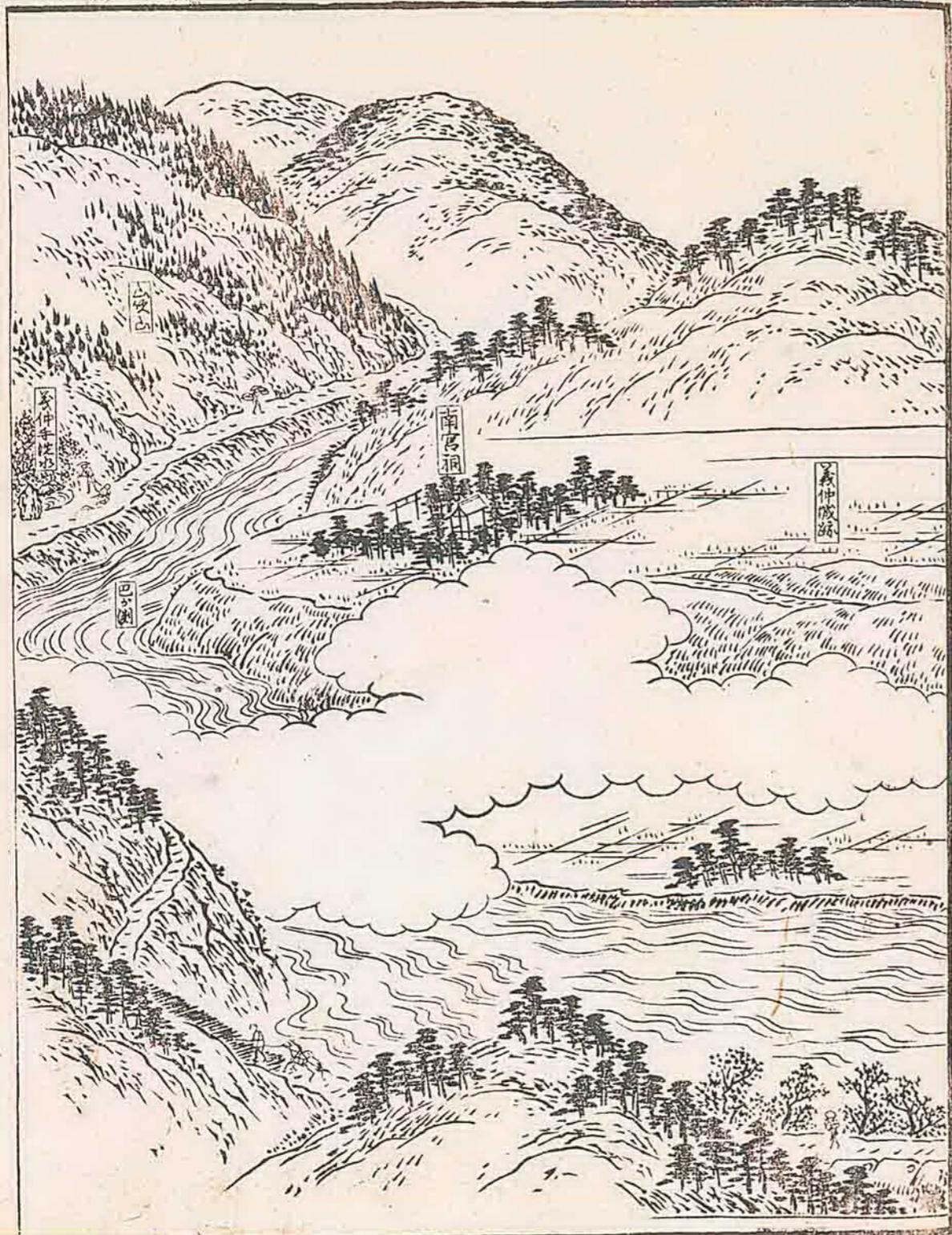
けく父義賢害せし向村二兼齊藤別當盛く種瓜匿して

に來り中二兼遠本托以兼遠を養育し彼を柏原村小築
てこれ小居し仁安元年相承八幡宮小築く元服以今の文の証
八幡宮是より名取本居二即義仲と云治承四年平家上皇と
鳥羽の難宮小藝居ふし時小源三位頼政が勸ふより高倉
宮義兵を起し今旨を諸國の源氏賜ふ義仲命を授け兵を
擧ぐ嘉永元年九月九日越後守長茂中後河原原に合戦し
大い小敗る長茂逃走ふ武威益著しく今井兼平樋口兼光親
忠根歩仍親耳目股肱の臣として後醍醐天皇と稱し同日二年五月平
軍十萬越中越後山小居る義仲逆小居て大よこ越後敗る平軍死ふ
その七万人殘兵系降に逃降る義仲北に逃去しく巖岳に登り七月
廿四日上皇巖山小潛幸に義仲供奉し洛に入ふと其軍兵凡五萬
平賊帝と奉りて西海小出毒以義仲父祖の恥を雪む每小不世の
功あり八月十六日倭條國武藏小左馬頭征夷大將軍に任じ上皇又命て

本居二二廿八

朝日將軍と云頗朝憲よ系トけれこれより先高倉宮害小遭ふ其
王子傳と云小園小流落を義仲こまに奉りて洛小入即位ありん
度をと上皇聽容あらば安徳帝の弟君と云天子に之人と是と
氣く聽ば大い憤怒を令む人ありと義仲小潜し上皇兵を起
義仲と討人と欲に義仲大い怒り十一月十九日軍以發し法任寺殿
と攻る官軍大い敗られ公卿令以殞る暴虐討ふ甚し源頼朝大い小
驚れ範頼義経の二將と使して義仲と征伐を元暦元年正月廿日東
軍洛小入ふ義仲栗津原に敗走し流落小中て首被抜く義仲の人
とあり勇猛ありて兵を用ふ率寡と云川小衆小勝向し所必勝救
率ありて大功を立一世の雄せし小居し物事ども不業にして術
か誤り大運小隔ありし幸傍む危し

樋口次郎兼光館大樹あり其地
中三権守兼遠の長子なり本居小左馬頭功あり所傳に



天王の其一方り元暦元年の春義仲の命以承り兵を率以河内小
越と十郎藏人を撃つ正月廿二日東軍洛小入り義仲殺さる兼光歸り
洛小入りんとしこれ城圍り大に悲しと遂に東軍に降る向ふ法住
寺殿攻り多く官人を殺し其罪赦さるるに及んで六条河原
にありし斬罪せしむ

今井兼平 鞍の東にあり

兼遠の次男なり元暦元年の春正月廿二日東軍洛小入り兼平兵を率て
王の一人なり元暦の春正月廿二日東軍洛小入り兼平兵を率て
勢を拒み軍攻めず兼光義仲を東に赴き粟津原に奮
戦し主君の戦死を聞くと忽ち敵軍攻め多く敗り馬上より自害し
後世其忠を賞は

巴御前 駒の北にあり巴女居る所の御所深小條に

中三兼遠が女なり義仲妻とて其勢力あり善教小妻永中

本巻之三十三

小陸の戦に兵を率く將とあり元暦元年正月廿二日東軍洛小入
義仲の軍敗れ勢弱小越に士率散れやある兵七騎巴女
其中にあり義仲巴女向りて日我運命今日小入り死す巴女と女子
試せし幸思くく後傍あり速く去る巴女止む事以
得る別が又歌の中へ入る小内田三郎家吉とて者之力のすあり
巴女と捕んとて馬と並べ巴女髪を持佩刀と抜首以りんと巴女
拳を擧て其肘と打首以り馬を馳らし山路を經本若小路其後
右大將頼朝巴女と居て和國義盛不取也と先多力の男子と生れ
居しや今以義盛と終に納り後朝比奈三郎泰秀と産み頗る
勢力を以りて世に傳ゆ

山吹 駒の北にあり土人云け所

平家物語云義仲小二妻あり一月巴女と山吹元暦の合戦に山吹疾
あり系作に止る又源平盛衰記に義仲小二妻あり一小葵一小巴何是

又善觀小葵破浪山其狀死二龍河トウツル以威云山吹之海標別當
盛が女らつゝ其是のるをををを

荻曾川 これ本為大河の上流なり

住還橋 本を繋いで抄とん

德音寺橋 徳寺守門お小あり

義仲手洗水 徳腰の東道の傍小あり

石碑云 往古木曾義仲公 鎮守南宮神社水

御手洗也 唱來廢年歷久矣歎之今

新造立石船者也

奈良井まで一里半 駅中南小五町許相對し

藪原 濃

巷以ふん其峰山同小散在ん

熊野権現祠 別系六月十五日

極樂寺 周山茂林和尚 古島十右衛門のこまは建る

本為三十一

藪原宅 古島十右衛門の邸中邸下邸等の址今みか田圃といふ

五反田橋 長サ十一間本と架して梁といふ

巢鷹官舎 府下の鷹匠本屋にあり

土産 駒 本為の諸村みかこををを

名造お六掃 は庭多し

折お六掃 本為此山中の名造りて

多く諸品を製造 これを比賣し業といふ

名して諸州小島 本を棟梁といふ

伊奘諾尊 伊奘諾尊にして清子素盞烏尊

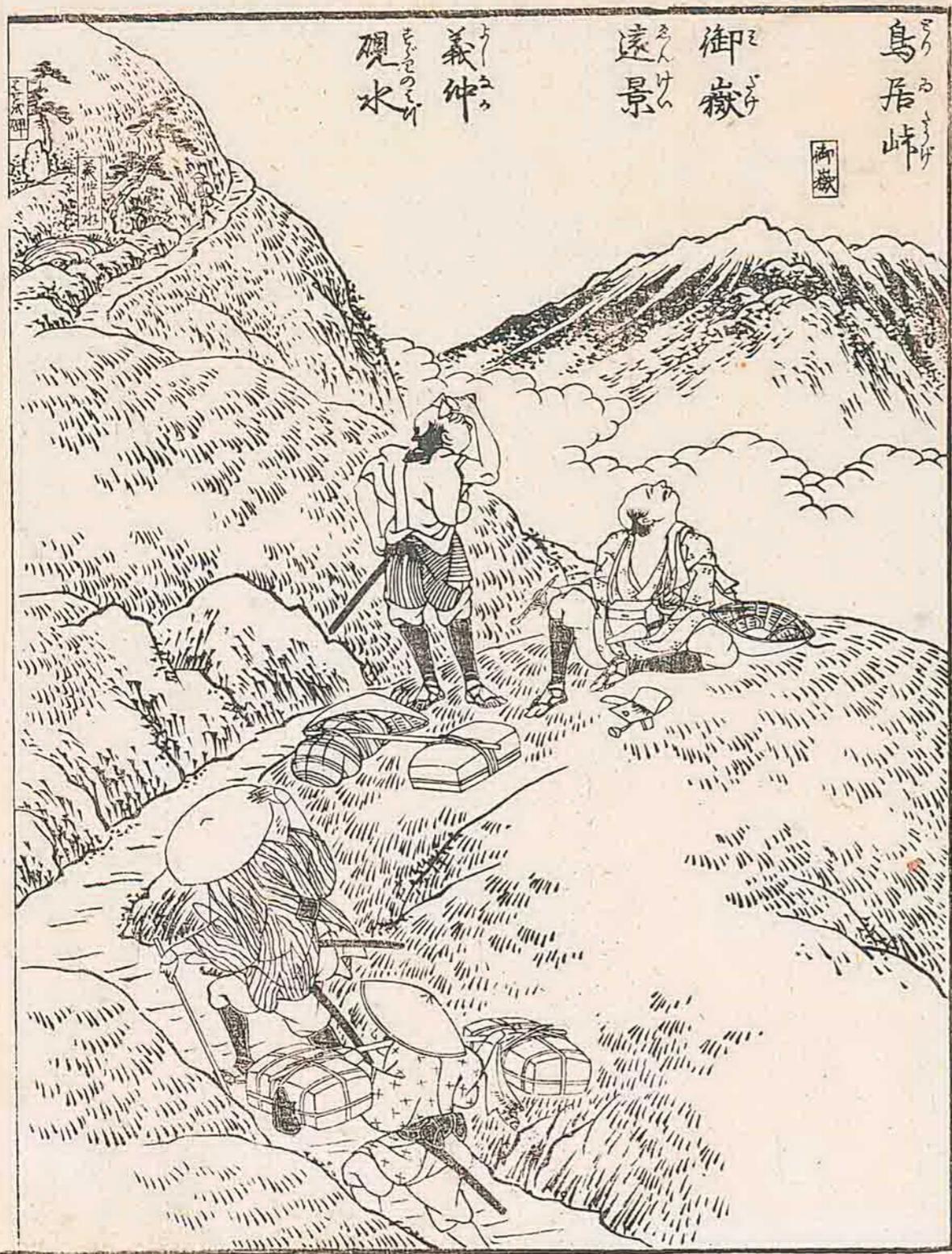
津の爪掃 を清誓小掃といふ

八品大明神 と崇光根匠の家々を掃とを

爪掃 排掃倉掃

系作後小路大原祠 と作特諾尊

八品 系作後小路大原祠と作特諾尊



鳥居峠

御嶽

遠景

義仲

硯水

昭神とん格匠とん神と糸く其恩惠汝報とん一と
 鳥居嶺 峠 嶽 坂 嶮 馬 本 系 ぐ した 危 け 所 あり けり 本 系 ぐ
 信玄 本 系 義 康 と ころ 合 戦 あり 其 後 天 正 十 年 武 田 勝 頼
 り 今 福 筑 前 大 将 と して 人 殺 八 千 餘 け 所 へ 洗 ろ 本 系 ぐ
 馬 頭 義 昌 信 長 公 の 所 方 と して 七 千 餘 人 ぬ 高 尾 嶺 へ 馳 向 け
 幾 ひ なる 本 系 勝 利 を 得 け 甲 州 勢 と 多 く 討 と る 度 謀 書 小 尾 一 郎
 武 田 信 玄 秘 訣 月 々 小 尾 一 郎 小 橋 一 郎 本 系 義 昌 其 外 教 養
 謀 及 び 企 及 中 畧 日 十 二 日 信 忠 卿 被 命 一 郎 所 出 陣 あり 其 所
 夜 土 田 小 澤 宿 あり 十 三 日 高 尾 十 四 日 岩 村 小 澤 宿 あり 既 河 左 衛 門
 将 監 毛利 河 内 守 水 野 監 物 同 宗 彦 虎 尉 十 二 日 の 未 明 小 岩 村 一 郎
 信 列 伊 奈 口 へ 打 越 也 日 十 四 日 小 信 列 松 尾 の 城 主 小 笠 原 掃 部 助 味 方
 小 笠 原 忠 常 と 被 命 一 郎 一 郎 團 平 八 森 勝 藏 若 せ 一 郎
 早 手 合 せ 一 郎 小 笠 原 掃 部 助 味 方 所 へ 烟 を 揚 げ 一 郎 飯 田 城 主

信長記
 武田信玄秘訣月々小尾一郎小橋一郎本系義昌其外教養
 謀及と企及中畧日十二日信忠卿被命一郎所出陣あり其所
 夜土田小澤宿あり十三日高尾十四日岩村小澤宿あり既河左衛門
 将監毛利河内守水野監物同宗彦虎尉十二日の未明小岩村一郎
 信列伊奈口へ打越也日十四日小信列松尾の城主小笠原掃部助味方
 小笠原忠常と被命一郎一郎團平八森勝藏若せ一郎
 早手合せて小笠原掃部助味方所へ烟を揚げ一郎飯田城主

植籠なる伴西星名さども方く逢公の體と見及ま抱まごくやひらん
其表則因死のく處小森勝後四五里隔陣取くあつては由因
一騎馳入り付退後まぐる者ども少く討捕頭三百餘信忠に
進上は叔勝頼と本曾表手遣申して今福統前も小巳が子の馬廻
ちり居加へ於合其勢八千餘騎者居赤表へ居きける二月初旬の頃
形は六殘雪降つて谷も雪も平等も成里一向叶ひがた拍さるればと
今福統前も武者大將として本居は(せ)働さる義昌が先勢も島居
味以前よあて高座の要害と據く居たり乃我が今福が手遣と安く
より早く先手此者は由進進して乃を義昌も安くぬ更本とて苗本
久義尉中合せ出張を於合其勢七千餘騎赤良井坂と喚き叫んぐひより
島居味母て今福と渡里合ひ既小合戦小なる殘雪谷峯に滿く戦場い
まゝひやふねをあのぼく割臆もいらるれば地して進小まぐる勇士た
互小言とあり辰刻より未半中まであを死を乃川里鏑をわり切川掃き川

本居三三三

南風小風とて先途也攻致ふりふあよ久義尉父子存れば山の廻とつひ
押廻し横捲小突をり難あくはさるる今福横陰小突をり突をり
敗亡しなれば三里が間退討むをせしめられ討捕頭の渥文宗流の者其跡
治勢が捕有覚備後も笠井笠原小山同左系進其外究竟の兵も五百
七十餘人なり其頸共中將信忠に(本居)義昌より持申す濟感斜
るるびりて使者小黄金百兩小袖三重下し送りたる義昌へ此類うれ
働の有濟感のまぢをいされたる高妻一死を信長記小あり付て見え
義仲親水 赤の方に飛騨の島とへは道あり是より十九里の飛騨か
ゆめははるより出る是より飛騨へは道はたかきとゆる
ある更さるるは多く半再乗る付来れと
白碑 雲雀よりうらふみやまゝに津う那
勢川まで一里半又猶井も書以駅中東為七町餘お對て
巷をならん其餘民家散在は宿繁昌の地ありて本居
駅中の甲たり

信
濃
赤良井

鎮大明神祠
 經津主命
 例東六月二十三日
 鎮大明神祠の西は小川の里老傳ふ云結年沖吳

鍋懸嶺
 伊奈郡の原にあり
 絶頂少く東の方を原と云ふ
 遠の味及び天

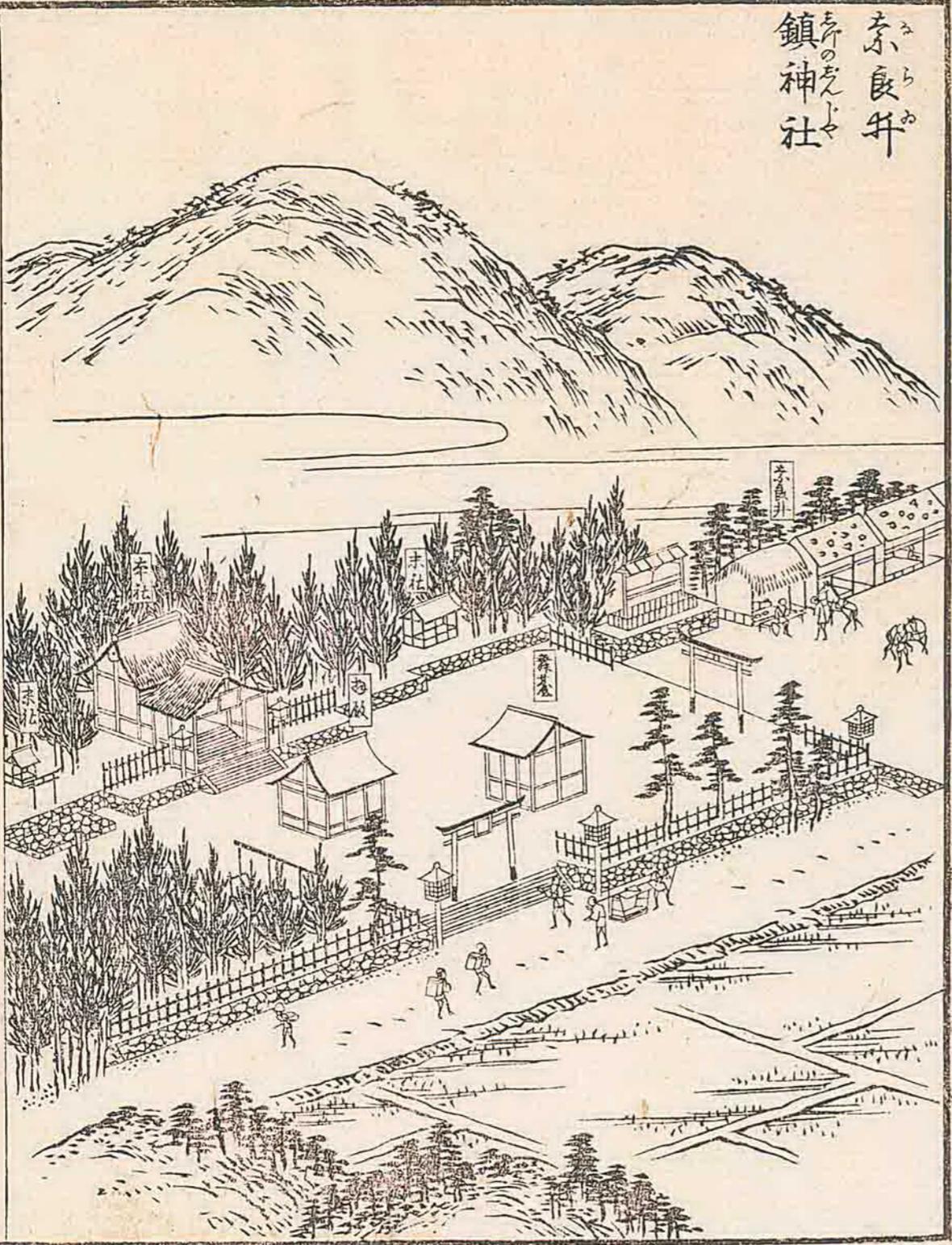
奈良井橋
 駿河小川の長十間本と云ふ
 最要害の所と云ふ

大寶寺
 天正年中
 宗良の号
 宗良の号
 宗良の号

長泉寺
 義高の墓あり
 王龍山と号し
 駿河真珠院に属し傳ふ云貞

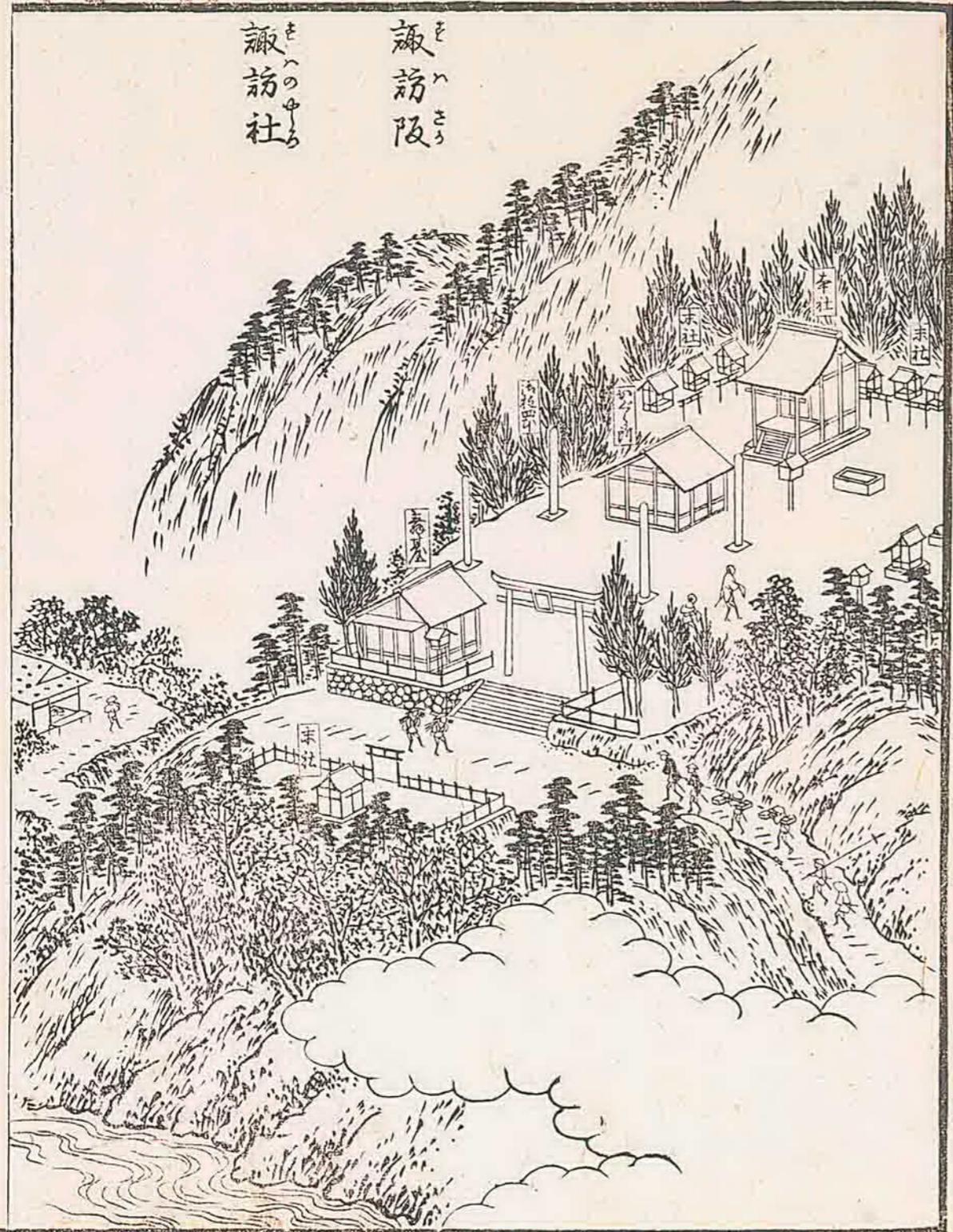
尚中興を藤田純登が信有と云ふ
 其牌寺あり信有あり信有あり
 景勝の部將小住居して武名あり中興あり信有あり
 去る系作小住居して武名あり中興あり信有あり
 白山権理祠 観音堂あり

奈良井
 鎮神社



奈良井治部少輔義高館信の後に天正十八年率以傳記詳々なり
 千村治郎右衛門重照宅今民居の重照自裁不林檎栗の村
 千村治郎右衛門重照の舎八郎右衛門重政の子なり父
 本名義高乃以義高不仕へて武功あり重照領比八千石
 其後義高下総國戸小遷不幾なりん〜義高率以
 その子仙三郎年若く放縦り家居詩もも種に及る
 道以致して去る其子孫
 今小正の尾列小奉仕を
 土産 稗粟 蕎麥 村水田あり唯稗粟
 鮭 海より流る所不物まども 鱒 河不長大なるもの三
 尺許 年毎こまと産して
 名造 諸器 小鬻くこれを向本細工といひ 諸器を製造して産業とて四
 誦訪明神祠 二年に創建 奉 累りて天正十年 本名
 義高 武田勝頼也不知りて典厩信豊小舎一 本名と
 政高 居味の合致小大を致ち祠を焚く齋記も亡
 失して幸實傳らば別系六月廿二日山所の生神とん
 奉社のに方より歩程に七ヶ年目毎に月甲寅の日
 建敷不神祭に舞臺神樂也
 其外末社多し

本名三十五



誦訪社
 誦訪阪

平澤 村の名と杉細工塗物と

熱川

幸山 幸山にて武里いりへる温泉あり故小熱川也
名はく東山道駅次け所より東流松平領と人西と

本名岩の岡みか尾列産の浄領なり 尚駅中東西に町
俗相對して巷流なり最般阜たり其俗の民居散在に

接澤橋 駅のひびにあり是本名伊奈の分界なり長サ十式間
造に傍ふ向本改

熱川 駒ヶ嶽より流れ其下沢犀川とて其水小流して松平に
至り試後別あり海入

楠本澤 伊奈郡小野村の界より小野村八ヶ岳神祠七年ふ
一後送美の時山中に入る本式百挺と代くこまと試む

諏訪社 一村は神とあり
生土神とあり

観音寺 貞言宗揚梅山堂号なり永隆智積院ふ属に寺傳云
元和二年郷高嘉
千村氏再建を

本名二北六

鶯着寺 曹洞宗飛梅山と号に
宗良井長泉寺小属を

押籠橋 尚駅の東路中にあり長サ十間本以架して梁
極ふ一園道なり

熱川四郎家光家 本名横波の家村の四子なりは取小居姓を
尾州氏と子孫
氏と其後三尾村小居一改先て

千村右衛門尉後政家 本名横波の家村の五子小郎家重上明千村
郷小居姓一其所を領をこわふより
其十世の孫後政なり本名義康に属しては邑小
居姓も其子右衛門尉政知本名義男小属一其後小居系
貞慶小通しては邑小居姓なり

長と方ふ其家には武田信玄の書一通小居系貞慶の状
二通本名義男の状
を通を蔵む

萩曾 本名義康の少あり
本名義康に属しては邑小居姓なり

獵諸獸 鹿猪羊熊等 本名此山中より獲て獲に統中

萩曾 黒川 赤川 西野 王藤 等 源山 岳谷 等 是は其多し

土産 絲綿 麻 又接骨薬 里人云む一人綱綱と捕し者ありて接骨
の傳方と授得と極く奇効あり

五月日橋 長七間

衣更着明神祠 本郷山の中麓村小あり衣更着の名甚だしく
徳ととも里民傳をたつて初とてせしめしむる

例系八月

糸川 網日 本郷の属邑に氏居山より

秀綱澤 合衆とて飛驒の團司に一年

黒川温泉 本郷の属邑にあり其土にあり泉甚だ温く味
疾ひとて多し者多く来りて浴せしむる

山神祠 本郷の属邑にあり村小あり村小あり一表とて
粟の飯を依りて秀綱澤とて出せしむる

其後郷人河成なる小金の光あれども取上りて其靈
豊臣秀吉公然茶之野の城主五郎八景近不余りて飛驒を討つ
人の元先小殺さるとし秀綱澤とて代々飛驒國の團司とて其父
権大納言自國といふ

本郷三十七

駕疲嶺 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺

焼棚 山頂の焼棚あり松檜蓊鬱とて里民の清く云
助く身の長七尺許あり時々農家小あり蓊鬱とて

を夾んて捨川山焼棚あり山頂の焼棚あり山頂の焼棚あり

と包む園子あり又一壺の酒も毒と入りて焼棚あり

其焼棚今に至りて焼棚あり

箕作 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺

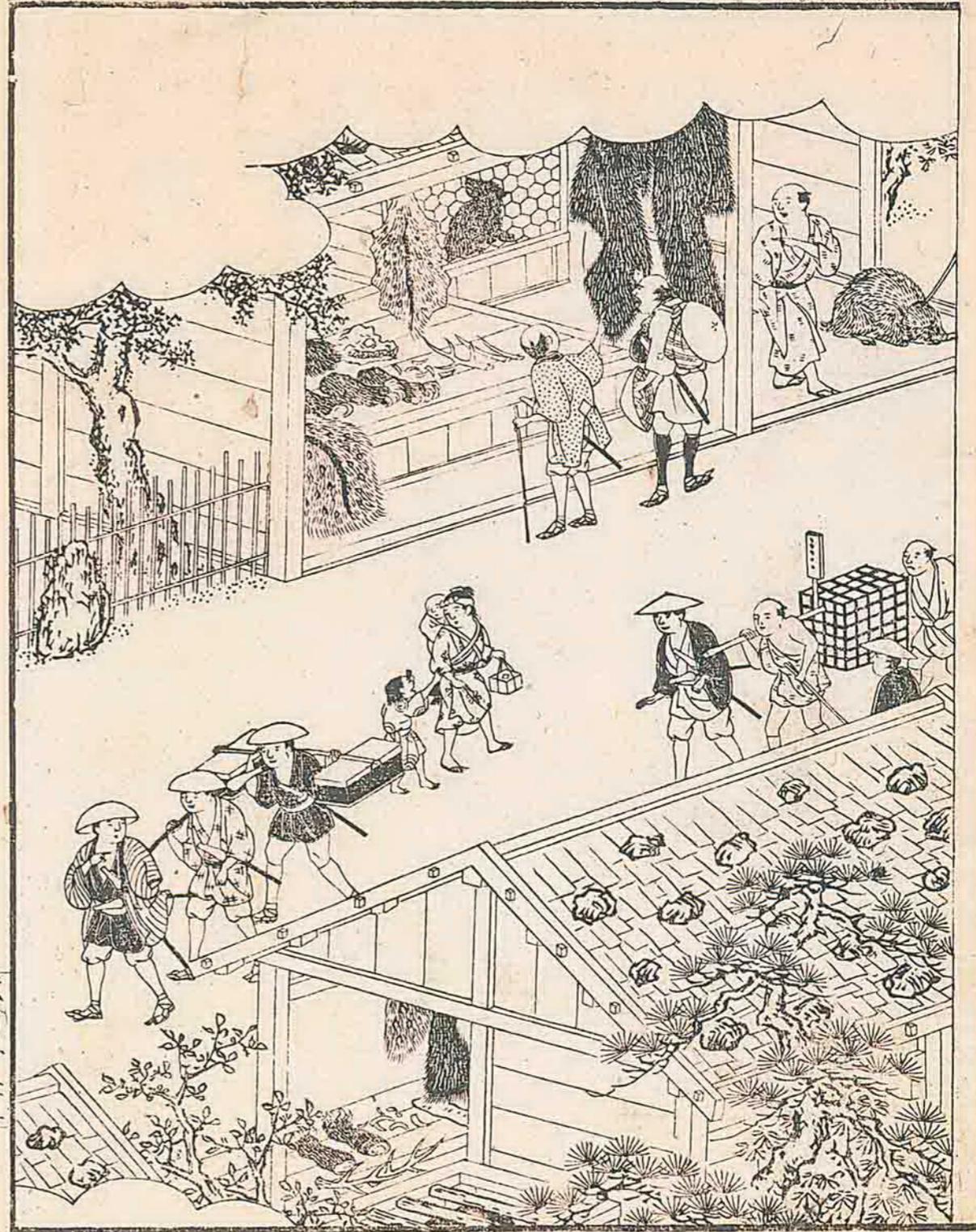
下郷 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺

童観 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺

今製 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺

蜂火墓 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺

小子墳 本郷山中黒川より赤川に至るの嶺



とくども山間本積雪あり料本生せば又三里登まば絶頂本至
 二祠あり一は王権現堂のひ一を日権現とらふ其西水の峯に三祠
 あり一と俱利迦羅とらひ一と八王子とらひ一は土祖権現とらふ
 其東の峰に二池あり一つの池に水涸るふ一は池ありあか
 一つの池に水涸る西野小流る其小谷地獄谷とらふ硫黄多く溪
 川ありて王権現のつる濁川とらふ是硫黄の氣にして其水甚ど
 臭き有り又山上小鳥あり乳鬼の如く毛交雌雄のどく人と
 見ても驚ば山上よ一草茂生ば葉蔭燕小似たり小菟咲く状董
 菜れおと色紅紫有り名づけく駒草中りふ又一草あり葉小
 似く大さり葉軟にして里人採て喰ふを芥菜とらふ
 氷瀧園道 王権現の有り滝越小至山路甚だ険絶壁數十級水涸
 たりは乃成生木一各代締て水瀧とらふ有司園道を造て山路
 傍小欄干と修りて実小谷中於この壯観あり駒次小水さる
 妙人見る更
 かなり橋あり

本巻二四十一

土産十一鳥

本巻谷中にみかれあり形臨嶺の如く一帯声十一と
 諸獸 猪鹿豺靈羊等山小多し獺野も亦多くこれあり
 熊皮 いみへと真くん本巻の山谷多しこれ狐狩り熊皮
 山神 獨子 本巻深山小これ頭栗前小狐獨の子れ如く
 絶あるひと神向くありひと港美にいて腰の下白く或る
 麻のてく斑文ありて脚黒く人を見く驚るに三に足つ
 群成なり十月初雪の後山中の窟舎ふ入まは傍小鳥
 敢て捕れこれを押也まは山神崇となはとらふ
 岩戸権現祠 王権現上修 岩間小祠を建清泉岩壁より涌出源くや

して絶び祠家傳云是御嶽の別宮なり毎年六月十日諸人
 御嶽に登り祠官導兒を文龜承正天文弘治永祿昔の祭文
 あり又御嶽の縁起一卷有り天正二十年二月也末よ書次天正
 の年号五十九年よく罷所謂二十年と云曆候ありや思われ
 む御嶽の鳥居ありふふのくは地と号んぐ今小鳥居
 原と云

本曾殿墓 二沢小里人其名状志了ん只本曾殿とくこれい本曾左
系大史我元飛孫の國司空合我くくふ終て軍敷まで令汝
隕以即此墓形くん矣

權守兼遠墓 二嶋小あり古石塔婆存んいづこの人ぬくふ噴と建る
崩越古城 二嶋の後北山ト本あり本右左系左史義元飛驒軍
三浦山 二嶋山本右の山にありて王滝より登付路あり

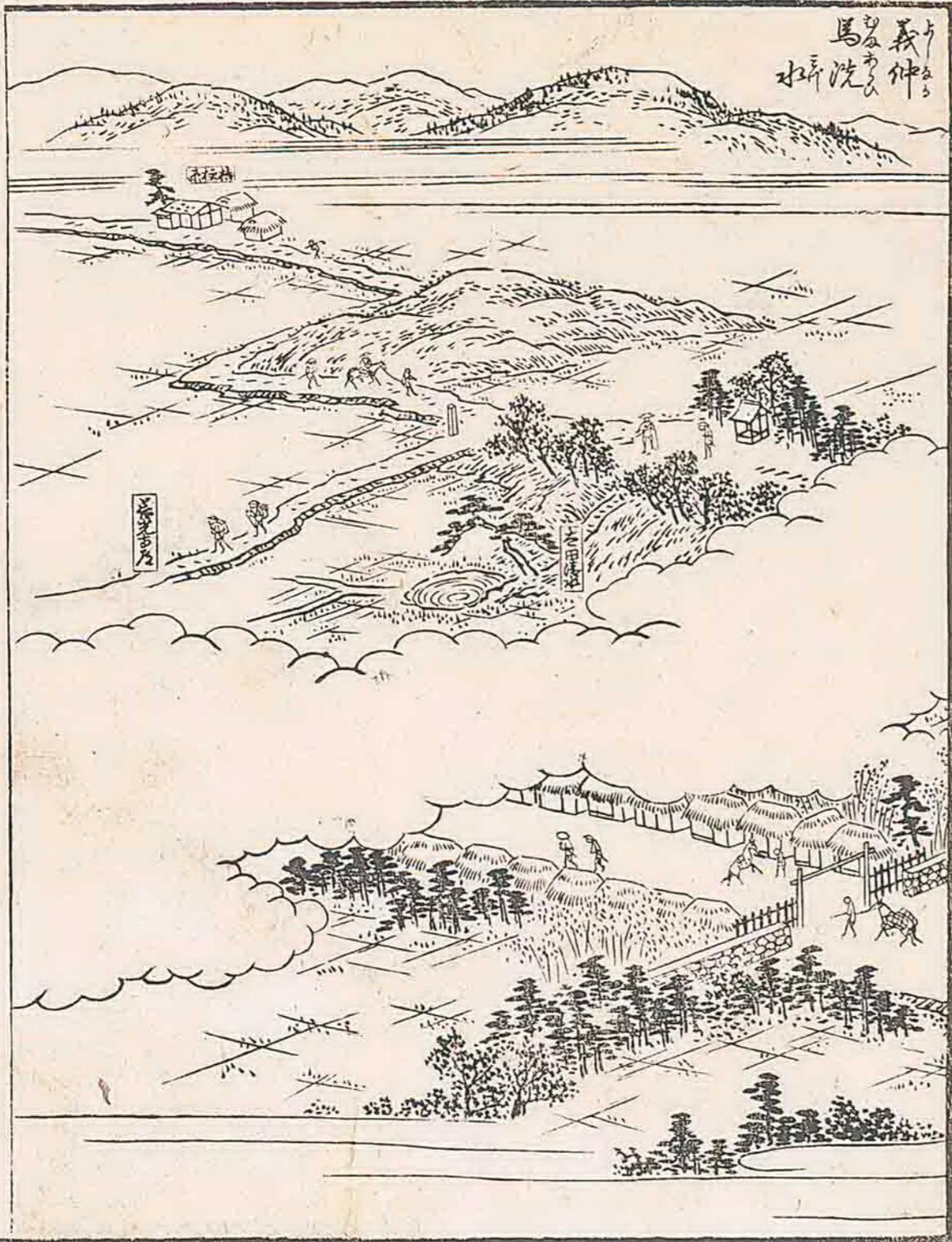
はふと津嶽の東山の林麓より登付横子坂とくくふ終て一峯
みつる名はあてお殿せつこの山へ遠く津嶽のお殿ありしとき
又高嶺も登まは飛濃信三列の東なり標を建て誌と速ふ
山状下川八町ありて一塔橋あり是九候の第一なり其下千
洞あり水無澤とくく又高嶺小隱む巨巖あり烏帽子岩や
つこれと登まは口方峰を歴くや見へく駿河の富士嶽此ま
白山も詳なり第六候も至れを洞あり琴沢とくく又板屋

ありくく小總ふ所なり已めて高嶺も登まは其間の山路を伏載し
て徑をふく橋を架して登をたれ艱難辛苦して第九候もふは高
山高嶺と極むとくく地平ありて大道のめくく谷奥倉倉とくく
則津嶽の岬なり其路左邊飛列小属し其上を飛列嶽と云飛孫川
よりふ知る其路の右邊信小属して終子嶽とくく其下に瀑布あり
旁と散れがめくく錦く百間嶽とくく是王滝川の源なり下流も本曾の
大河小流合ふ其上の嶺石壁屹立易くくは嶺小これを登まは飛信此
界あり不至ふ九第一候より第九候もある行程路十里惣夫の道小
通ふく下小自若にける其西岸即本曾王滝山なり其東の岸
山中三浦とくく一の板屋あり板小舎とくく里人云むくく三浦をま
つ者ありて岡壘してくく小岳に極むも寒苦くく終て岡壘
居臥越越小極むこれより自若に至り越越小嶽ふ九百間嶽とくく
自若小至くく行程又十里許山中度大なりは山中に良材あり

擬本似る樹あり葉極く小きり倍まねを都賀とらん又一種あり葉細
わけて背白くむすして竹のやうに輝く裏白擬とらん倍これと白比る
と名づく又一種あり細葉ありて齊整とらん是は虎尾擬也号く
倍は唐松ともいふ種白本屋小可きり又一種あり葉細くふして流る
その何れ阿羅之本と号く又新羅松及び五粒松とらん葉極く似
洞一樹の皮まき一葉の若く倍ふとらん青ぬ古といふ其本と試て新
とすふつと乾くはよ種燃ふ種所歎と追ふく雲灰侵してふま入
時は本と試て焼くは一一寒と凍くまうと揮本何れ別本州ふと種は
我は其皮炬とらん其灰鷓鴣炬也号く蓋これを焼くは一一あふ入くも
滅は故小務を使ふその灰は炬を焼く水と照して凍をふ可し
又白樺と名づくふみの何れ其皮重なり為く割とれは紙のごとく
炬燵小可なり又樺の本は似るその何れ皮厚く本理ありこれを
水芽とらん 杖小製杖とらん又雲葉本とらんあり即本州は我は

倍小色深を号く紫陽小似る葉細長し竹のやうに赤実似倍
○は山小鳥あり巢灰け離と生は鷓鴣のやうに甚くまう又一種鳥乃
乳鶴のごとく灰黒色去人呼て海鳥とらん是幸州は所謂山鳥なり又
御嶽蓋樹の地小鳥あり取難の如く朱冠青趾羽色黒白相同る其名と
鶴といふ但し棲とわく雲中にあり人見る幸州なり
○三浦吉丈の宅中三浦山あり里老相傳く云和国合戦の時其族交
小逆く思ふ其後滋越小移ふ今に至りて滋越村の百姓は三浦氏也
林に終成訛りて三年移りて猶三浦の字と書は東鑑母和国義盛
跋ひ敗て首と接くは時一族を討死に只朝比奈三郎泰秀其後前
族とて泰秀の母と巴女なりは女本名兼遠が女めて泰秀は其子孫と
後世より小逆居るとも知れず滋越の百姓兼遠を祀りて地主神
とらん三浦吉丈の墓中三浦山の中あり古樹多く墳あり是和国義盛
の族建ふなり逆くは是とらん幸州は頗其子孫力ありあり是和国義盛

義仲の洗馬水



洗馬 真福寺

栝 梗 原

武士の墓

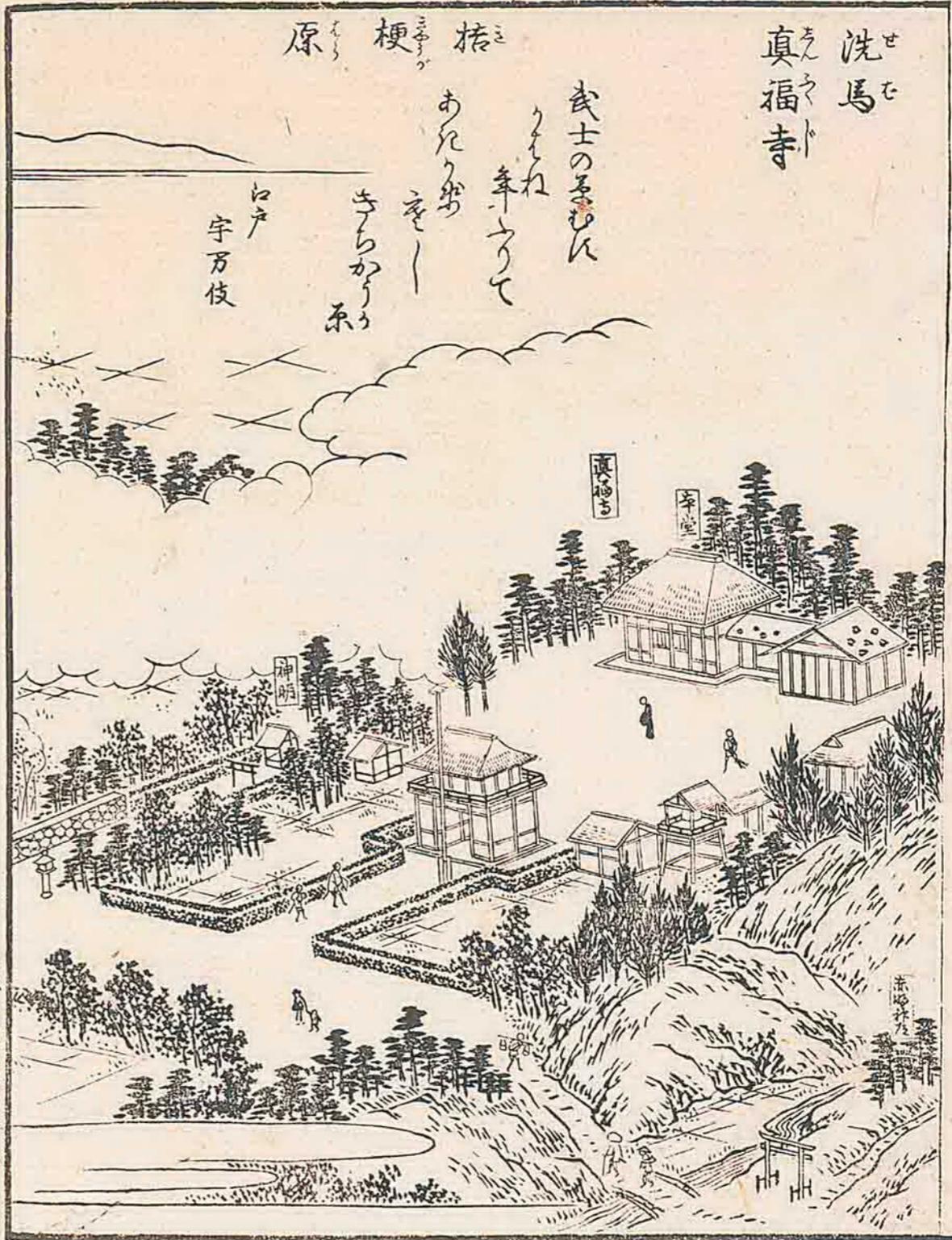
あはれ

きりかき

宇万伎

宇万伎

宇万伎



小郷本行其里人之岩と脚丈六十人あくと種族推ふは程り度と地は去ま
 其子に余と肩と架して往く里人大小駭く且大木茂採擷ぐ杖と一木
 多小帰ふ又馬と負く心と越る幸遊越して見る勢の必死の勢力朝比
 奈三郎小あはれして准るあんと小居る更更して疑危うは
 一一條と鎮主の有司本者の山中巡檢のありむれこ
 其本者誌を省畧し且本者路駭跡小罹一のを
 くに著んぬる

都々落合の駅よりけ驛まで廿一里あり岐嶺の山路ありて崖
 路棧道多く艱難辛苦の路中より勢川より柿本村中畑若神
 子斤平小橋沢大那本大橋沢多く本者路の界之あ小標本育
 西と尾別津領東と松本領よりて往て場橋とふまこ大橋沢の
 上よ千足原とより所ありて是六本者義仲多く馬沢畑一所
 かりとせと屋死沢は橋あり存は親音堂又園の森の中は八幡
 宮の庭は橋あり幸山小つた所

本者二四十四

本山

洗馬まで三十町西の入は小橋あり川左小流るこ往も本
 者山より流是出る本者の幸谷ふちありは
 幸山親音堂幸山の取の信列巡礼所廿一表く小沢川を過くこり
 橋あり長サ十間橋爪小龍大神の鳥居ありこれを遠ふまをね人煙
 行くやして又より新樹程狐隔く隣たぐひ小疎一東約西切の
 客とみか知事ふありは村南村小成るこ洗馬の駅ふつる

洗馬

信列河中流へ十一里松代へ十六里く
 義仲馬洗水及小洗馬とあり

東鑑云

治承四年十月十三日木曾冠者義仲
 尋亡父義賢主之芳躅出信濃國入上
 野國仍住人等漸和順之間為俊綱足
 利太郎也 雖煩民間不可成恐怖思之

由加下知云

善光寺別道 洗馬の東

栝梗原 洗馬と栝梗の間にあり遊獵の里なり此所少くなく麦畑あり

其外小笠原氏とは栝梗が原にて

信長記

武田信玄の嫡子武田玄勝即義信甲府を殺馬あり小笠原家と攻亡

まぐそく本号は押を子南河あり栝梗が原に押向ひ小笠原備甘利

左衛門尉飯室二郎平衛尉其外馬場内藤喜日三往ら五頭と先小進んで

既小栝梗原より出まは旗本隊もあ後陣の勢ありと栝梗原より城に

大膳を丈長時と一家の同族は小瀬貞基舎弟刑部お備以下三千餘人を

招向らゆは勢六月六日巳刻栝梗原に馳出く既小旗砲を打遠く往社あり

互ひ小笠原入まき退り退り相殺し小笠原隊員六百七十九人討死し

て原志とて引退けは長時大の怒り軍勢奮然叩く其勢四千六百

栝梗原に押切り翌七日の卯刻より城を破り歎味方馳合せ栝梗小原と

下ある二つ四十五

信 堀 尻

真躰小原汗馬東為小馳遠く経旗南水に入孔まて防を敷ひる分岐と境
百千の雷乃一度お落りおかとお中ゆる小笠原勢と今日城限と切りひ
定し幸あねお切まとも殺も弱らばおお味方此手負死人を踏おえと
りま先小とを進るるおれりいさ信玄の武威強大とて成にるるなりた
と武田軍記紙巻く見るべし

下諏訪へ三里堀尻峠より西と松平領ありは所より四里あり

松平丹波守彦の領地と六万石信列あり山間處と平原の地

かりは色のあまみお城後の旁へ流る又お水より仁科と通る

越中へ行道あり

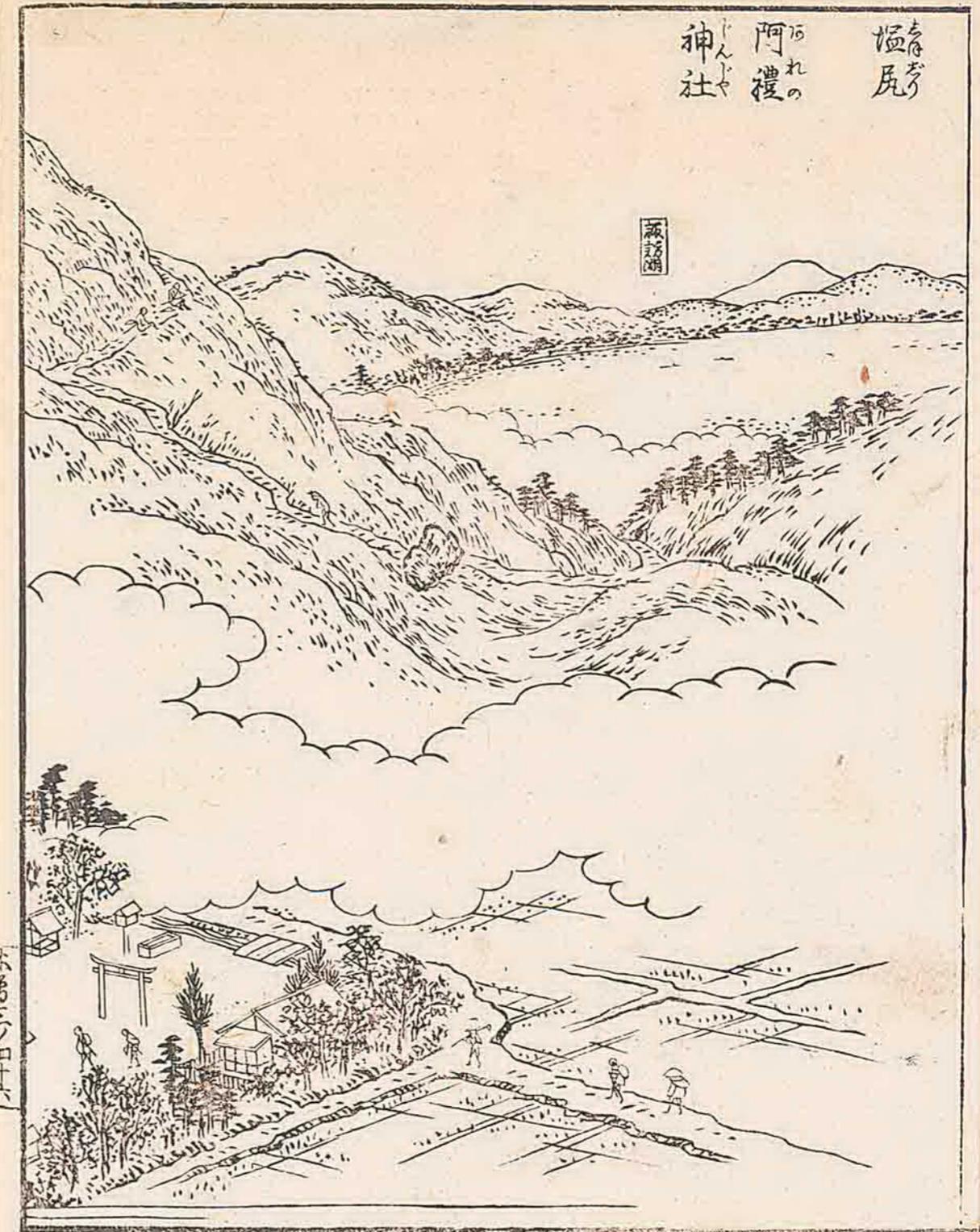
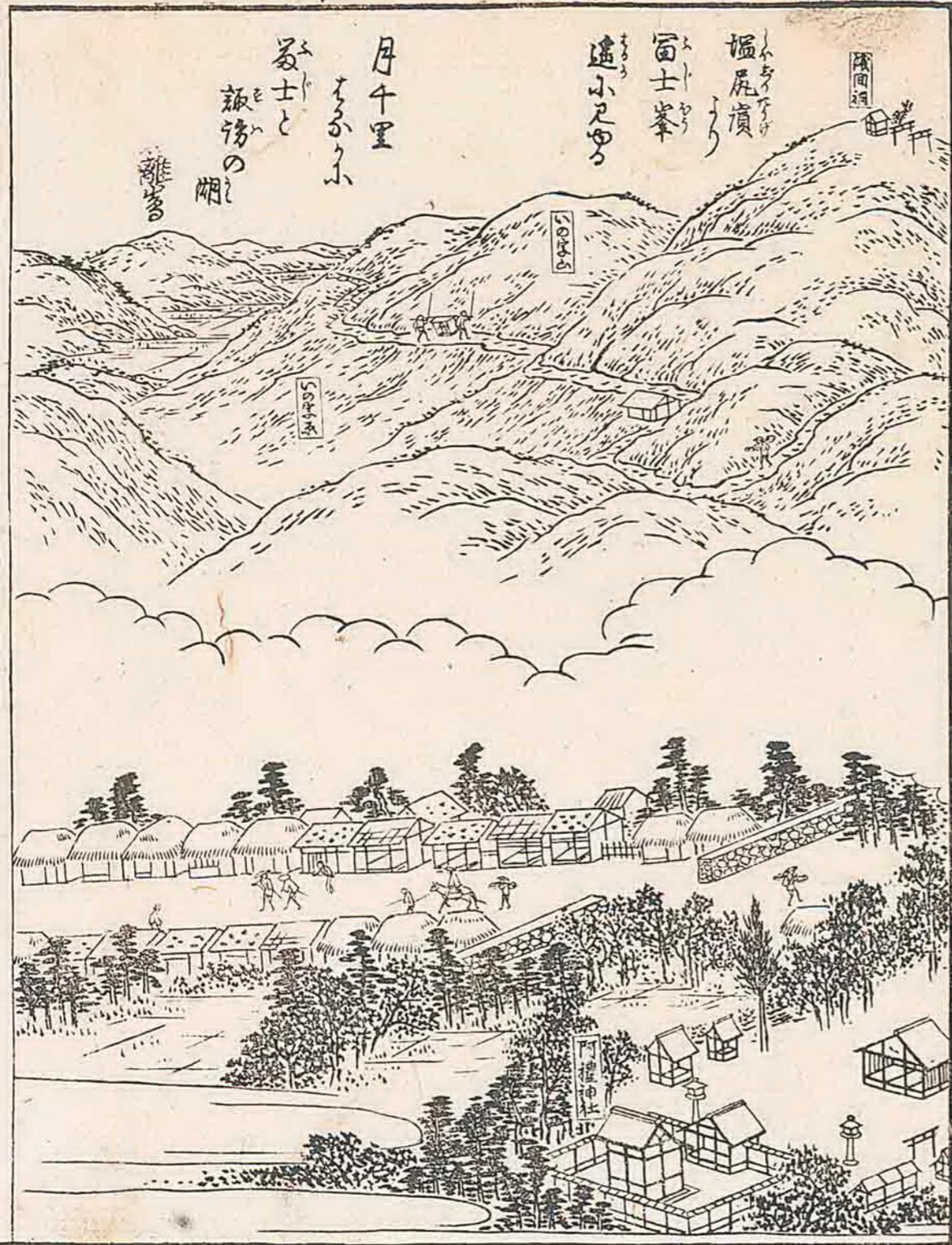
阿 禮 神 社

塔尻小原の延喜式神名帳小云筑摩郡二座の内之大門村
の生土神といは御祭八月十六日今八幡と稱し拜殿

若神庚申子安半頭天王痘瘡神誦詠多賀度瀬松田松尾

犬 飼 清 水

喜日祭のあり
堀尻遺のあり
お水よりゆあり



塩尻

塩尻は尾下湯原の所あり塩尻より二里登る嶺より
何某と格殺ありしゆは信州勢と甲州勢と
信州軍記

武田晴信翌日卯刻小塩尻市小若くは敵味方間を揚ふや否と抜さ
けまき切て入鎗合せ追勝し之盡しあはれ夜と敵ふりされども
敵はま戦ふり味方と長途小若其上一系有餘の敵兵小味方備ふ
六千城之内と相戦む甲兵大小若果とせ見くころは付され晴信
肩とも志のハ旗半城の横入め七頭八例して敵ひあふは或は
馬上母と紐で敵首をさくゆもあつらひは隙ありとも足さりたる
然れども晴信自兵隊麾を軍率以励し之に敵兵は半退るされ
足並四度路よあふは敵軍の中より足皮履をまく麻毛する馬小
乗る武者指物を切おし仰殿あはれはめと馳來り鎗をりて
晴信の右の股をきりし小突所を晴信其後かの鎗の穂乃首以極を
たすし駿がね俵してゆりまふは小山田平治左衛門尉馳來り其武

本巻三十四

者以馬より逆ふ引落し押へく首をうれはれりるを敵軍大ひ小
引まきく熱軍極に敗走に信州の二將の由と着陣せざる内なるはふ
雲合の集り勢をひく小一手切の合戦して手負死人若干は六挺を
とまはれ捨子と親と顔と体とより小逆遠く討殺小首とゆ
幸八百七十二級より晴信の思慮し給ふおしも遠く安んず敵と追
為し軍勢大小勇あり諸卒拵骨以て中し小山田平治左衛門
働と他小異とを則感状をせ下さねる

今十九日卯刻於信州塚原郡塩尻市一城之初頭一ツ討
捕桑神妙之至惟跡可抽忠信復肝要也仍如件

天文十七年申年七月十九日 晴信

小山田平治左衛門より

晴信と河中将小澤政家あれども敵一騎もあはれを返さ十月十日
甲府小澤陣し給ひ多る河中将軍記ふりして見るべし

